『ぬれぎぬ』

作:広田淳一

執筆期間:2014.02.04-
再演:2020.08-

【戯曲について】

◎表記についての解説と上演に際しての注意

【、】 読点。常用の意味と同じ。 ※意味の区切りとしての使用と、時間的に間を空ける意味での使用と二通りある。この記号の前後が連続的に発音されてもよい。

【。】 句点。常用の意味と同じ。 ※注意は右に同じ。

【・】 中黒。固有名詞などの他、特に時間的に間を空けて欲しくない場合の「読点」として使用する。 ※この記号の前後は連続的に発音される。

【★】 黒星。前の人物の台詞の語尾に重ねて言う。 ※いわゆる食い気味。

【☆】 白星。近くにある同じ数のこの印の付いた台詞が同時に発話される。意味上は無関係。※舞台上に複数の会話が存在する場面で使用する。「同時」の厳密性には拘らない。

【／】 スラッシュ。台詞中で使用される。間髪入れずに台詞の調子・方向性を切り替える。

【＝】 イコール。

【使用1】語尾に「＝」が付き、続く行の語頭に「＝」が付く場合、間髪入れずに次の台詞が始まる。

【使用2】語尾に「＝」が付き、行（他者の台詞）をまたいで語頭に「＝」が付く場合、それらは連続した発言である。 ※ある人物の台詞の間に挿入される他者の発言、あいづち等を待たずに話し続けろ、という意味。「無視せよ」という意味ではない。音声の被りが発生する。

【[]】 大カッコ。近くにある同数のこの記号と同時のタイミングで始まり、音声が被ったまま発話される。

【▲】 黒三角。会話しながら退場する。

【△】 白三角。会話しながら登場する。

【──】 ダッシュ。読点より長い時間的、あるいは心理的な「間」。

【「間」、「一拍」】沈黙。「間」の方がより長い。

（このような）括弧内の文字は発音されない。

このような傍点付きの台詞は強調の意味。強調して発音するとは限らない。

【登場人物】

【向井】……（33）人材派遣会社「ニンゲン」に所属する派遣社員。
【有島】……（30）人材派遣会社「ニンゲン」に所属する派遣社員。元・法務官僚。
【門田】……（26）殺人犯として収監されている男。
【佐野】……（24）門田の凶行の被害者となった女性の姉。
【占部】……（40）大量・安楽死殺人の犯人として収監されている女。
【村田】……（24）ソーシャル・ケア事業関連会社「キョウセイ」の本社正社員。「キョウセイ・リンク」に出向している。新人。
【遠藤】……（43）「キョウセイ・リンク」の事業所・所長。社員。

【エピグラム】

伝統的個人主義をいわゆる原子的個人主義として見れば、全ての人間に備わっている理性というようなものによってくくられてしまう。ですから、啓蒙の個人主義をつきつめていくと類的人間になるんですよ。そういう普遍的理性によってくくられない個、ギリギリの、世界に同じ人間は二人いないという個性の自由は、むしろ、啓蒙的個人主義に抵抗したロマン主義が依拠した「個」です。この西欧的な個人主義に内在する矛盾の問題はぼく自身も解決がつかない。

丸山眞男

【0】 開演前

▼音響:客入れ音楽はナシ。雑踏の音。

【1】過去の夢

◎ふたりの家　1　着信

日本の一地方に設置されたリバータリアン（自由至上主義者）たちの行政特区。
この地区では刑務所が民営化されており、個々の刑務所ごとに様々な特色を出そうとしている。

舞台上、無音。
うっすらと明かりが舞台上に灯っている。

深夜のオフィス。
やがて舞台上に一人の女・有島が登場。スーツ姿。ビジネス用のバッグを持っている。
有島は机の前に座り、バッグから書類を取り出して整理をしている様子。

舞台上、別の場所に一人の男・向井が登場。
向井は携帯端末を手に取り、電話をかける。
と、有島の端末の着信音が鳴り、彼女はそれを取る。

有島　もしもし？
向井　ああ、りっちゃん？　りっちゃんかいこの電話これ？
有島　当たり前でしょ。
向井　まだ会社？
有島　うん、そうだけど。
向井　なに、今日も泊まり？
有島　あーいや、いったん帰りたいとは思ってんだけどね、
向井　ふーん、そう？
有島　うん。着替え持って来てないし／ってごめん、何も言ってなくて＝
向井　＝いやいや、いいんだけどね。あ、そう？　帰ってくる？
有島　うん。
向井　帰ってくる。［帰ってくるかあ。
有島　［なになに、どうかした？
向井　いやー大変ですね。遅くまでお仕事。
有島　なに？（笑）
向井　いや、もう、びっくりしたーホント。かなり怖めだった今日の。
有島　（いつもの話かという感じで）ああ、なに、夢？

向井　うん。なんかすーごい緊張感あった。いやー、もうホントね、今日はちょっと、かなり怖めだったなあ。
有島　なに？　どんな夢だったの？
向井　え、いや、なんかいつものまた、おんなじなんだけどさ。
有島　いつものね。
向井　そうそう、いつもと同じ。
有島　前に住んでた所？
向井　多分そう。前に住んでた所で／「ああ、またここに戻って来たんだな」って思って。なんかさあ、よくわかんねえ地下鉄の駅みたいな場所にいるんだけどね、俺＝
有島　うんうん。
向井　＝こう、ホームのベンチに座ってんのよ、スーツで。そんで「ああ、おでん喰いたいなあ――」と思って。
有島　おでん？＝
向井　＝おでん、おでん。というのもね、まっ白なはんぺんを買ってそれをまっ白な子猫に与えたらどうなるんだろうかと、そう考えてまして＝
有島　＝どういうこと？（笑）
向井　こう、おいしいはんぺんをうまく食べられない子猫とはんぺんと、お互いモフモフして、モフモフと格闘するモフモフみたいな？　モフモフ頂上決戦、モフ・バーサス・モフ、みたいな？　さぞやかわいいだろうなと思って。ラヴリー。キュート。応えられない愛らしさ。
有島　それを考えてたわけね、ベンチで＝
向井　＝そう！　そこに電話がかかってくるわけよ。プルルルつって。出るわけ俺。「あ、もしもしー」かなんか言って。そんでも鳴り続けてんの、電話。ブルルルッつって。あれ？　と思ってもう一回ちゃんとボタン押さなきゃっていって画面見たらさ、――隣に座ってた兄ちゃんがスッーと立ち上がって「あ、もしもしー、俺、俺――」つって。はい、着信音止まりましたけどォ、みたいな？　――怖かったあホント。
有島　★怖くないじゃん全然！　――え、大丈夫、ねえ？
向井　大丈夫大丈夫！　あ、ごめんごめん。まだ仕事あんのにね、深夜にすみませんでした。
有島　え・え？　なに、それだけ？
向井　それだけ。うん。
有島　なんだよもう。――じゃあ、もうほら、――明日も早いんだしさ＝
向井　＝あ、うながされてるー。ここで通話終了のホイッスルかー？
有島　なんなのちょっと。［もう用事ないんだったら、
向井　［あのさあのさ、りっちゃん――最後にもうひとつだけいい？　もしも俺がね＝
有島　うん。
向井　＝その、以前いたどこか、わかんないけどその、以前いたどこかに引き戻されちゃったとしてもさ、――会いに来てくれる？
有島　――まあ、行けるとこだったら＝

向井　＝論理的。さすかりっちゃん、確かにね。行けるとこじゃなかったら来られないもんね
＝
有島　うん。
向井　＝登りたいと思ったって誰もがマッキンリーに登れるわけじゃないからね。
有島　マッキンリー。
向井　じゃ、会いに来てよ。来られるとこだったら、なるべく。
有島　行くよ、行く。うん。
向井　じゃあ――おやすみね。
有島　うん。おやすみ。
向井　りっちゃんも無理しないで。
有島　はーい。

向井、電話を切って、退場。
右の会話中に、一人の男・遠藤が登場しており、以後、観客に向けて話を始める。

遠藤　えー、とかなんとか言って眠りについたわけなんですが、結局彼は、電話を切ったそのあとまんじりともせず夜明けを迎えることになりました。

一拍。

遠藤　「まんじり」ってなんでしょうね？　「まんじり」。まんじり。――まん。――じり。

一拍。

遠藤　ちょっとやらしい感じしますね。しませんね。すみませんね。ともかく――翌日も彼と彼のパートナーである女性、――有島「りっちゃん」は朝から仕事でした。

場面転換。

【2】門田／占部

◎門田の場合　1　出勤

出勤風景。
電話の音があちこちで行き交っている。
だんだんと呼び出し音が消えていき、ひとつだけその音が残る。
一人の男（遠藤）がその電話に出る。

遠藤　はいはい？
有島　あ、おはようございます、有島です。
遠藤　はい、おはよう。
有島　あの、すみませんでした、今日は朝礼に出られませんで。
遠藤　あー、いいよいいよ。そんでなに、もう着いた？
有島　はい。今、着きましたんで、これから所内に＝
遠藤　＝ああ、そう。そんじゃ行ってらっしゃい。
有島　はい、行ってまいります。［失礼いたします。
遠藤　［はい。はーい。がんばってねー。

有島、電話を切る。
場面転換。

◎門田の場合　2　面談

ソーシャル・ワーカーとの接見室。
一人の男・門田が椅子に掛けている。やや落ち着かない様子で周囲を気にしている。
有島がその傍で二人分のお茶を注いでいる。

有島　かえって落ち着かないですかね、こういうトコじゃ？
門田　え？　ああと――。
有島　ホラ、しばらくはアクリル板みたいのがずっとあったでしょ？　目の前に。ドーンて。
門田　ああ――アクリル版。
有島　今日からはこっち（の部屋）を使わせてもらうことになりましたんで。もう、門田さんは安全だろうってことで許可が下りまして、はい。

一拍。

有島　そんじゃ今日は二回目の面談ということで、ね。改めましてあの、よろしくお願いします。
門田　（力の入った様子で）はい。よろしくお願いします！
有島　★あーあー、いいです・いいです、そういうのは。どうぞ楽に。
門田　はい！
有島　――もうあの、好きなように話していただいて結構ですんで。言葉遣いがどうとかそういうのは一切なしってことにさせてもらいましたんで。

一拍。

有島　えーと、どこまでお話しさせてもらいましたっけね前回は。

有島、書類を探る。

門田　控訴するっておっしゃってましたけど。
有島　（書類から目を離さず）ああ、控訴はね、おいおいでいいと思うんですけど。

別の場所で向井の独白が始まる。

向井　僕は、人材派遣会社の「ニンゲン」ていうとこに務めている、向井と申します。非正規雇用の、いわゆる派遣労働者ってやつをやってます。

有島、取り出した書類のページをパラパラとめくる。

有島　まずは門田さんがね、公判の中でこう、――反省すべき点は何も無い、って意味のことを繰り返しおっしゃってたでしょう？　それが私気になってまして。――どういう意味なんだろうなあ、って。だからそうですね、――そんなところからお話していってみませんか？

一拍。

門田　はぁ。
有島　ね。――どうなんでしょう、そのあたり？
門田　だからもう、すべて調書通りでいいですよ。
有島　あ、そうですか。すべて調書通りで。
門田　はい。
有島　って、ここで話終っちゃいますとね、なんのためにいるかわかんなくなっちゃいますから、私。今日はちょっと、その先の話をしたいなァ、なんて思ってるんですけど。

有島、再びファイル（あるいはタブレット端末のページ）をめくる。

向井　「ニンゲン」てのが僕の登録してる会社の名前なんですけどね。いや、いくら人材派遣だからって「ニンゲン」はねえだろうって話なんですけど。僕がその「ニンゲン」から派遣されまして、現在務めているのがこの「キョウセイ・リンク」っていう会社なんですけど、ここがまたニンゲンに輪をかけて、ブラックな香りが漂う職場でして。

有島　門田さんはその、「愛しているからこそこういう結果になってしまった」と、まあ、そういう意味のことをおっしゃってるわけなんですけどね、そのォ、――ま、普通に考えますと、愛しているんだったら――その人の可能性を奪うようなことはしないんじゃないかなァって思ったりもするんですけど――どう、なんでしょうかね？

一拍。

門田　普通は＝
有島　＝ええ。
門田　――愛しているんだったら、どうするものなんですか？
有島　そりゃ普通は、――分ち合おうとするんじゃないですか？　愛を。人生を。未来を。
門田　僕がやったことはそれです。
有島　なるほど――。門田さんはでも、結果としては彼女の将来を奪ってしまった。それは、分かち合うっていうのとは別のことなんじゃ無いかなァ、とも思うんですけど。
門田　命を分かち合った、とは言えませんか？
有島　いや、なにうまいこと言ってるんですか（笑）

有島、冗談ぽく笑う。
門田は笑わない。

有島　言ってないですよね。うまいことは別に言ってない。

向井　安月給だってのにサービス残業は基本だし、有給なんか取っているひと見たこと無いし、
村田　なんだったら定休だってガンガンに削ってきますもんね、
向井　それなんだよ。っと、これは最近うちの事務所に来た村田玲奈ちゃん。
村田　だいたいシャワーと寝袋が常備されってる会社って、おかしいと思いません？
向井　要するにそういう会社でした。玲奈ちゃんはペーペーの後輩だってのに「キョウセイ・リンク」の親会社である「キョウセイ」本体からのいわゆる本社出向で来ているがゆえに僕らの
向井・村田　上司！

向井　はじめから、のっけから、ハナっからの
向井・村田　上司！
向井　っていう、ちょっと複雑な後輩です。

有島　ですからあの、あなたがやったのは奪うこと、なんじゃないかな、とも思うんです。奪うことはだって、分かち合うこととは別のことでしょ？
門田　――違いがわかりません。
有島　いや、わかるじゃないですか＝
門田　★わかりません。
有島　＝えーと、だからあれですよ。もしも、もしも優奈さんが今も元気だったとしたら、もっともっと多くのことを分かち合えたのにって、［そう思いません？
門田　［あの、あの、あの、
有島　はい？
門田　名前で呼ぶのはちょっと――。それはなんか＝
有島　＝ああ、そうですか？
門田　――すみません。
有島　いえいえ。こちらこそ。

一拍。

有島　（頭を下げ）失礼しました。
門田　★これはあの＝
有島　＝はい。
門田　――なんのためにいらしてるんですか？
有島　あー、私？
門田　はい。ちょっと、申し訳無いんですけど自分、この時間がどういう時間なのかってことがよくわかっておりませんで。
有島　ですよね・ですよね。急に来てそんな、ねえ？　あー、どういう時間なのか／あ、あの、いいですよホント、言葉遣いはもうリラックスした感じで。――っていってもね。なかなか所内の人とこう、切り替えが大変かもわからないですけど。
門田　――はあ＝
有島　＝まず前提としてはですね、私はこの町の、つまりこの行政特区の独自制度として門田さんにお会いしてるわけなんですけども。
門田　特区ですか。
有島　はい。そもそもこの国の刑務所ってのは、ものすごく再犯率が高かったわけですよ。せっかく出所したのに半分ぐらいはもう、すぐ戻って来ちゃう。
門田　ええ＝

有島　＝で、それは一体なんでなんだろうな？　って考えた時にですね、結局、受刑者の方々の心の中の問題、――反省しているとかしていないとか、あるいは、どうして社会に適応できなかったのかな？　ていう原因究明の問題。そういったことがですね、あんまり解決できていなかったんじゃないかっていう反省がありまして。
門田　ええ、ええ＝
有島　＝そこらへんをこう、――民間も協力して、まあ、なんかうまくやっちゃってくれよ、と。そういったわけでその、私ども「キョウセイ・リンク」のような民間業者が外部委託を受けてやっていると、まあ、そういうわけなんですが――って、これ伝わってます？　［なにいってんだって感じですか？
門田　［ああ、はい、いや、まあ、なんとなく、は（伝わってます）。
有島　すみませんなんか、あんまり説明が上手じゃなくって。
門田　いや、でも大変なお仕事なんだなァってことは＝
有島　＝あ、伝わりました？　よかったー。や、あたしが疲れちゃってどうすんのって話なんですけど、あ、そうそう、（おみやげを差し出し）これあの、よかったらいかがですか？
門田　え、え？
有島　こないだ出張で九州行って来まして。はい。
門田　――どうも。
有島　もうあっちこっち行かされんですよ、研修とかって言って。あ、あ、そうだ。有島でいいですよ。名前。
門田　――アリシマ？＝
有島　＝ええ、普通に名前で呼んでくださって結構ですから。「名前で呼んでんじゃねー」とか言いませんので。
門田　あ、はい。有島さん。
有島　はい。

向井　で、こっちのこの、有島りっちゃん、と僕はあの、職場結婚と申しますか、「妻」って言っちゃうとちょっと言い過ぎになっちゃうんですけど、
村田　ええ～？
向井　みなさんの感覚でいうところのいわゆる「妻」みたいな、そういう存在だと思っていただければ大体、間違いないかと思います。ってなんかちょっと曖昧な言い方になっちゃってますけど、それっていうのはつまりここでは、
村田　この、特区では、
向井　以前僕が住んでいたところみたいな「結婚」ていうシステムが無くなっているからなんです。だから僕とりっちゃんは一緒に暮らしてはいるんですけど、特に役所に届けを出すこともなく、そういう戸籍上の手続きってものを一切せずに同棲していたんです。要するにここでは、
村田　この、特区では、

向井　誰と誰が結婚してもいいんです。男同士でェ、とか、女同士でェ、なんてのはもちろん余裕でオッケーですし、一夫多妻とか多夫一妻とか、挙句の果てには多夫多妻とか、とってもフリーダムなことになっておるわけです。

お土産のお饅頭の小さな包装を開ける門田と有島。

門田　――僕はあの＝
有島　＝はい。
門田　――二度と顔を見せないで欲しいって言われたんです。彼女の視界に入るなって。しかも、本人からじゃない。代理人て人から、メールもするな、手紙も出すな、リアルでもネットでもこれから一生関わるなって。
有島　――はい。
門田　だから、分ち合いを拒否したのは彼女です。僕じゃありません。僕は分かち合いたかった。分かち合いたかったんです。分ち合うって、――なんですか？

一拍。

有島　えー、それはあれですかね、あのォ、――彼女の未来を奪ってしまえば彼女をその、自分のものにできる、っていうか、そういう感じのことを思ったってことですかね？　自分だけのものにできるんじゃないかっていう＝
門田　＝できるんですか？　そんなことが＝
有島　＝いや、――私が聞いているんですけど。
門田　★僕も聞いています。――できるんですか？　彼女を殺すと自分だけのものにできるんですか？＝
有島　＝できないです、［できないですけど、
門田　［仮に、仮に、そんなことが出来るんだとしたら僕は彼女を何度でも殺したい。何度も何度も生き返ってもらって何度でも殺したい。［何度も何度も。
有島　（机の上に置いてあるボイス・レコーダーを示して）［門田さん、門田さん、あの、えー、あの、録音、ありますから。
門田　――だったらなんですか？
有島　いや――できませんよ、そんなことは。そんなことはできません。

間。

有島　だからあれですよね？　彼女がそういう、近づくなとか、そういう命令を出したことが門田さんには辛かったって［ことですよね？

門田　［でもそれは理解していました。――僕が好きだと思っても相手がそう思ってくれるとは限らない。いや、僕が好きだと思えば思うほど、相手は僕のことを好きではなくなっていくんです。いつもそうでした。いつもいつも。

有島　いつも、――というのは？＝

門田　＝だからいつもですよ。どんな時も、オールウェイズ。

有島　オールウェイズ、んー。

間。

有島　ま、それはじゃあ、一旦いいとして＝

門田　＝はい。

有島　――ご遺族の方はあなたに対してその、極刑を望んでおられるわけですけど、それについてはどう、受け止めてらっしゃいます？

門田　ま、僕と同意見だな、と。

有島　んー、そういうことじゃなくてですね――。まあ、死刑ってわけにもいかないですし＝

門田　＝どうしてなんですか？　どうして？　［そこがわかりません。

有島　［いや、だって――。だって、あなたが殺めてしまったのはお一人ですし、それにその、――んー、殺し方も特に猟奇性が高い、残酷な殺し方をしたってわけじゃないですから。

門田　★じゃ、複数の人間を特別残酷なやり方で殺せば良かったと言うんですか？

有島　★いや、そんなこと言っていないじゃないですか。［過去の量刑との兼ね合いとして、

門田　［でも、そう聞こえます。複数の人間を特別残酷なやり方で殺さなれば僕を死刑にできないと＝

有島　＝それはだから――行政の問題もありますよ。ここはそういう特区なんですから。基本的に死刑というのはありません。

門田　でも、僕は死刑にしてほしいんです。死刑でいいですよ。もう。

門田、有島から目、体を背ける。一拍。

有島　それは、なんでしょうその、――死にたい、ということなんですか？

門田　全然違いますよ。だって、――え？　自殺と他殺は同じですか？　全然違うじゃないですか。雲と綿あめぐらい違います。

有島　――見た感じは結構近いような気もしますけど＝

門田　＝僕は自殺なんてしません。それはだって、ものすごく罪深いことですよ。自分に与えられた命を全うしないなんて、無責任です。

有島　いや、普通に考えたら人の命を奪うのも無責任で、ものすごく罪深いと思うんですけど／

門田　★死刑にしたい人がいるわけでしょう、僕を？　さっきそういいましたよね？

有島　ええ、そうなんですがその、――まだご遺族の感情というのも事件から日が経っていないですから、だから門田さんがちゃんと反省して、心からの謝罪を行えばまた／
門田　★許すわけ無いじゃないですか。娘さんを殺されてるんですよ？　わかってるんですか？
有島　いや、――ええ、わかってはいるつもりなんですけどね。
門田　★なんで時間が経つと忘れるなんて思うんですか？　きっとご両親は彼女のことを忘れません。いつまでもいつまでも、決して。だからご両親が僕を許すことはありません＝
有島　＝でも――許してほしいとは思いませんか？　どんなに長い時間がかかっても／
門田　★だからなんで許されるんですか？　大切な娘ですよ？　どうでもいい人間じゃない。どうして許すんですか？　許す必要もない。そうです。一生、許すべきじゃない。

間。

有島　するとその、――あなたは死刑を望まれているという現在の状況、これを受け入れたいと？
門田　――そういうことでいいです＝
有島　＝違うんですね？　どうぞあなたの言葉で。
門田　★いや、もうそれでいいです。調書通りでいいんですよ。もう、何もかも＝
有島　＝それじゃ話が終わっちゃうじゃないですか。
門田　★だから終わっちゃっていいんですよ！　――あとは好きなように書いといてくださいって。なんでもかんでも有島さんの好きなようにお書きになったらいいじゃないですか？　あることないこと好きなように［書いといてくださって結構ですから僕は、
有島　［いやいやいや、あることないことって――そういうわけには行かないじゃないですか。
門田　★取り調べでもう話しましたよ！　何度も何度も！　［何度も何度も！
有島　［そうですね、そうですよね、それはだから、――そうだと思うんですけどね＝
門田　＝続ける必要を感じません。
有島　でも、これは裁判じゃないんです。もう裁判は終わりましたから。
門田　★じゃ、なんですか？　なんなんですか、この無意味な繰り返しは？
有島　ですから、

一拍。

有島　あなたに心から反省していただくための＝
門田　＝教育ですか？＝
有島　＝いいえ。――もちろん、そういった意味合いも無いわけじゃないんですが／
門田　★結構です＝
有島　＝必要なことなんです。門田さんには。

門田　心からの反省は僕が心から反省したくなった時にします＝
有島　＝はい。ですからぜひ、私にそのお手伝いを／
門田　★結構です。

間。

門田　本日はどうもありがとうございました、ご丁寧に。
有島　いやいやいや、門田さん。まだ時間はあるんですからそうやってご自分で、
門田　★もういいですよ！　もう結構です！

間。

有島　それじゃあ、今日はこれで。

有島、席を立つ。

有島　失礼します。

有島、退場。
場面転換。

◎門田の場合　3　連絡

有島、携帯端末を取り出して電話をする。

有島　あ、お疲れ様です。有島です。
遠藤　おお、お疲れさん。あれ？　もう終わったの？
有島　はい、今、終えまして。
遠藤　ああ、そう？　すごい早かったね。
有島　はい。まあ、ちょっと、途中で打ち切られちゃうような形になりまして。
遠藤　あーそう？　そんじゃさあ、――なんだったらこっち合流しちゃう？
有島　はい？　こっち？
遠藤　や、今、俺ね、駅前のあそこ並んでんだけどさ、あの、こないだ言ってたつけめんの店
＝
有島　＝ああ、はいはいはい。
遠藤　★なんだったら来ちゃう？　俺、並び直してもいいからさ、［もう一回。
有島　［いえいえいえ、どうぞあの、――召し上がって来てください。
遠藤　おいでよ。出すよ、こんぐらい？

有島　いや、あの、事務所に戻って進めておくこともありますんで。
遠藤　いや、ホントおいしいとこらしいからさ。
有島　ああ、そうなんですねえ。

間。

遠藤　［おいでって。
有島　［結構です。
遠藤　じゃあ俺も食ったらすぐ帰るから。
有島　あ、はい。どうぞごゆっくり。
遠藤　そんじゃ、ご苦労さんね。
有島　はい。お疲れ様です。失礼いたします。
遠藤　おつかれねー。

電話切る。
場面転換。

◎占部の場合　1　殺人問答

再び接見室。先程の部屋とは別の場所。
壁越しに机が二つおいてあり、一人の女・占部と向井が向かい合っている。
少し後ろに村田が座っており、その様子を眺めている。
占部が机に置いてあるノートをひとつ叩く。

占部　まあ、何遍も同じこと言っちゃって恐縮なんだけどね。
向井　ええ。
占部　なにその、殺人とか？　人殺しとか？　興味ないんだよね、そういうの。
向井　伺いましたね。
占部　だから聞かれてもわっかんないんですよ。どういう考えでェーとか、どんな気持ちでェー、とか、知るわけないじゃん。
向井　知るわけないですよね。
占部　うん。
向井　ただ、――そうは言ってもですね、実際にあなたは罪を犯しているわけですから。興味があるとか無いとか以前の問題として＝
占部　＝あたしはお手伝いをしただけなんです。
向井　――お手伝いといいますと？

占部　そんなさあ、たくさん死んだって言ってもみんなヨボヨボの死に損ないでしょ？　だからお手伝いをしてあげたわけ。だいたい興味持つほどの価値無いよあたしなんか？　頭おかしいおばさんが起こしたありがちな事件なんだから、いいじゃん、それでもう。
向井　ありがちというにはあまりに犠牲者が多いわけなんですけどね。
占部　★いーんだよいーんだよ、人数なんてどっちでも。
向井　いや、良くはないですよ人数は＝
占部　＝そう？＝
向井　＝ええ。
占部　だって普通さ、百回高尾山登ったぜーて人より一回でも富士山登ったぜーって人を尊敬するもんじゃない？　人は。
向井　いや、ちょっと意味がわからないですけど、そのたとえは。
占部　なんでよ。なに高尾山も知らないの？
向井　★いや、知ってますよ。そうじゃなくて、ルートによるって話です。
占部　ん？　ルート？
向井　だから富士山と高尾山をそうやって一概に比較しても意味がないでしょ。
占部　――なになに？
向井　富士山だって季節とルートによっては初心者レベルの山だとも言えるし、高尾山だって時期とルートによってはベテランでもそれなりにてこずる山なんですよ。
占部　――知らねーよそんなこと。なに、山好き？　の方？　登山家？
向井　（抑えつつ喜んで）いや、――登山家ではないですけど、
占部　なに喜んでんだよ＝
向井　＝喜んでないですよ、ちょっと、――趣味で。
占部　ふーん。や、でも、山好きに悪い人はいないっていうからね。いい人なんだろうね、あんたも。
向井　や、聞いたことないですけどね、そんな説。
占部　いうでしょ、動物好きに悪い人はいないとか。
向井　まあまあ、それは。
占部　あたしも好きなんだよ動物は。山は嫌いだけどハムスターはずっと飼ってたんだから。かわいいんだよ？　飼ってる？　あんたもなんか動物。
向井　いや、なにも飼っては無いですけど。
占部　飼ったほうがいいよ絶対。心が豊かんなるよ。
向井　心――。
占部　あれだよなんか、柏餅みたいでさ、ハムスターは。丸っとしてて。あ、そうなんだよ、柏餅とハムスターの合体したキャラクターがあんだからさ。知ってる？　キーホルダーとかになってんだよ。
向井　ああ、じゃあ。今度調べてみてみます。

間。

占部　いいじゃん、もう死んじまったやつのことなんか話さなくて。ね？　どうせそいつの人生終っちゃってんだから今更なんも変わんないって。

間。

占部　なに？
向井　反省しなければいけないんですよ。［最終的には。
占部　［だから、反省はしてますっていうのに。してんじゃん。
向井　そういう口先だけじゃない、心からの反省が必要なんですよ。
占部　★心からの反省してたってこういう態度なの、あたしは。――しょうがないだろ、こういう顔で生まれて来ちゃったんだからさ＝
向井　＝顔のことなんて言っていませんよ。［そうじゃなくて、
占部　［じゃあさじゃあさ、今度会う時にはお化粧させてくれたらいいじゃん＝
向井　＝お化粧？
占部　そしたらもっとこう、思いっきり眉毛下げて困り顔メイクでさ、思いっきり反省してみせるから。
向井　あのねえ、占部さん＝
占部　＝なんだよ？
向井　もし今、あなたがもう一度同じ立場に立たされたらどうするんです？　これじゃなんにも変わらないじゃないですか。
占部　変わるよ。今度はもっと工夫してやるって。絶対見つかんないように細心の注意払って／ハハハって、うそうそ（笑）。
向井　占部さん。諦めちゃいけませんよ＝
占部　＝は？　諦める？
向井　あなたは変われるんです。いくつになっても、人は自分の望むように変わることができる。
占部　――本気で言ってんのあんた？＝
向井　＝もちろんです。
占部　★言ってて恥ずかしくない？　「（誇張して）人は自分の望むように――」あるわけねえだろそんな話。
向井　そりゃ簡単なことじゃ［ないかもしれませんけど、
占部　［じゃあ、なに？　死んじまった連中も望めば生き返れるのかよ？　ピョーンて飛び起きて元気に幸せな人生をまた始めんの？
向井　もちろん、亡くなった方は変われませんよ＝
占部　＝だろ？　［そうじゃないかよ。
向井　［だから、だからこそ、生きている占部さんが変わっていかなければいけないんです。亡くなった方々の分まで。

占部　――頭固いねえホント。
向井　え？
占部　って言われない、あんた？　言われるでしょ？
向井　――僕の話はいいんですよ、
占部　★クラスに一人ぐらい居たもん、あんたみたいなそういう頭でっかちなさ。
向井　だったらちょっと――話題変えましょうか？
占部　お、いいね。なに、競馬の話？
向井　そんなわけ――。んー、じゃあ、もう、占部さんの好きな話でいいですよ。
占部　えー、ホント？　あたしの好きな話？
向井　競馬はちょっとわかんないですけど。
占部　えー、なんだろう。あ、モルモットを丸呑みにするヘビの話とか？
向井　なんですかそれ？
占部　すっごいよあれ、見たことある？　こう、丸呑みにすんのよ。
向井　ないですよそんなの、
占部　すごいよホント？　でっかいヘビがこうさ、マルモットをモルノミにするんだけど／
向井　★いやいやいや、
占部　モルモットを、丸飲みにするんだけどね＝
向井　ええ、ええ。
占部　＝その餌としてモルモットの死体が売ってんだよ、パック詰めになってネットの通販で
　さ＝
向井　ええー。
占部　＝それをやるわけ、こうやって。パクーって。
向井　ああ、そうなんですね。豊かになってないじゃないですか、心。
占部　そんなことねえよ。十分、豊かになってるってつーんだよ。
向井　ええ、ええ。
占部　興味ないね、この話？
向井　ま、さほど――。
占部　そんじゃ、あんたのお給料の話とか？
向井　だから僕の話は［いいですって、
占部　［あ、ねえねえねえ、ボーナスとか出んのあたしが反省すっと？＝
向井　＝ええ？
占部　よくやりましたーつって。ちょっと分け前くれんだったら反省してやってもいいよ。上
　手いんだからあたしそういうの。「ああ、かけがえのない命を奪って申し訳ありませんでし
　た！　私の命で償いをさせてください！」
向井　――出ませんよ、ボーナスなんて。
占部　ショッボイなあ。
向井　ええ。ショッボイんです。

間。

占部　どうしろっつーのよあたしに？　終身刑です。はい。――これ以上どうして欲しいの？
向井　ですから、先ほどから申し上げている通り＝
占部　＝心からの反省？　してるって。これ以上無いよ。もうあとはメイクしないと。
向井　んー、そうですか＝
占部　＝そうなんですー／ってなにそれ，いい時計してんじゃん？＝
向井　え？　時計？
占部　＝なにどこの、どこの？
向井　やあ、別に、――どこのとかってわけじゃないですけど＝
占部　＝いくら？　四、五十万したの？
向井　いや、そんなしませんよ。ま、せいぜい七、八万てとこじゃないですか？　もらい物なんで。
占部　ああ、なに、奥さんから？
向井　んー、まあ、はい。そうです。
占部　ふーん――。
向井　なんですか？
占部　その時計で何人の子供の命が救えるんだろうね。海の向こうのどっかの国ではさ。
向井　――何が言いたいんです？
占部　たとえばね、あんたのその時計売っぱらって募金のひとつでもすりゃ誰かの命は助かるかもしんないわけだよ。ていうか助かるよ。だろ？
向井　まあ、そうかもしれませんね＝
占部　＝でもあんたは時計を外さない。――いいと思うよ。海の向こうのどっかのガキなんて知ったこっちゃない。関係ねえ。だからさ、どうせ興味ねえんだからそのガキどもにあたしが注射して周ってたとしても、イチイチ目くじら立てんのはやめてもらえないもんかね？　っていってんだよ。
向井　んー。

一拍。

向井　僕の時計と＝
占部　＝うん。
向井　あなたが犯した罪と、――何の関係があるっていうんですか？　［なんの関係もないですよ。
占部　［そりゃ全然、関係あるでしょ。むしろさ、え？　あんたの時計と、あたしのやったことと、何が、どう違うっていうんですか？　［って感じなんだけど、
向井　［全然違うでしょ。まるっきり違いますよ、［それはもう最初っから、
占部　［ホラホラホラ、ね？　そうやって正面からの議論は逃げるんだよ＝

向井　＝そうですかね？
占部　★うん、うん、うん。いいと思うよ。誰だってそう。誰だって向き合いたくなんか無いよ。「自分の犯した罪なんて軽い。他の人間に比べたらはるかにマシだ」そう思わなくちゃやってらんないよ。
向井　言っときますけどね――僕はなにも法律に触れるようなことをしてるわけじゃないんですから。
占部　へー、合法ならいーんだ？　なにをしても？
向井　言ってないでしょそんなこと。もう、占部さんも子供じゃないんですから。
占部　★合法だろうがなんだろうが罪は罪なの。ま、もしも罪なんてものがこの世にあるんだとすれば、の話だけどね。
向井　――ホント混ぜっ返すのだけは得意ですね。
占部　お、来たね。いいよ、大歓迎だよ、そういう悪意＝
向井　＝いや、そうじゃないですけど、
占部　★結局さ、あんたもあたしも考えてることに大した違いは無いんだよ。「他人のことなんて知ったこっちゃない」それだけ。［その程度。
向井　［僕はべつに、――そんな風に考えてませんよ＝
占部　＝考えてなくてもそう振る舞うんだから同じだろ？　見知らぬ他人の命より、うちの猫ちゃんの病気が心配。
向井　あのねえ、少しは考えたらどうなんです、人の命の重さっていうのを。
占部　★考えてるよいつでも。あ、それか、あんたみたいないい時計つけたらあたしも命の重さってやつをもっと理解できるかもしんない。

間。
占部、傍らの村田をチラと見て、

占部　なんなの、（村田を指し）さっきからずっと黙ってっけど。新人？
向井　え？　ああ、見学ですこの子は。学生さんで――。
占部　（少し笑って）学生？　ふうん。（村田に）こんなの見てて楽しいか？　――まあ、楽しいのかもな。こうやって「悪い」ことをした人間がタバコも吸えねえでイライライラしてんのを見ててさ。――たくさん勉強して立派なソーシャル・ワーカーになったらいいよ。がんばれよ！　がんばれがんばれ、もうなんかすごいがんばれ！

村田、占部の大声にも臆することはない。不可解な目線で占部を眺めている。

占部　なにこいつ、日本語わかんねえの？
向井　いや、わかりますよ。でもまあ、ちょっと耳がアレなもので。
占部　は、耳？
向井　ええ。ちょっとまあ、

占部　聞こえないの？　え、マジで言ってんの？　［なにしに来たの、ホント？
向井　［あー、一応紹介しときましょうか、あの、村田さんです。

村田、向井に紹介されて会釈。

占部　どうすんの、こんな障碍者連れてきて？　キモいだけじゃん？
向井　どうするってことも無いですけど別に――。
占部　★なにを学ぶんだよ、見てるだけで？
向井　いろいろですよだから。んー、――人生とか（笑）
占部　――はあ？＝
向井　＝あ、でも言っときますけど、この子は「殺人犯」を見学に来たわけじゃありませんからね。知らないんです、あなたの事件のことは何も。
占部　――なになに、どういうこと？　［なんで？　なんで？
向井　［まあまあまあ、――伝えたければ、ご自分でどうぞ。

向井、席を立って外へ行こうとする。

占部　なんだよ、もう終わり今日は？
向井　いえ。あとはどうぞ――お二人で＝
占部　＝いやいやいや、待って待って［待って、
向井　［なんですか、なんですか？
占部　なにいってんの、は？　聞こえねえんだろ？
向井　はい。ですけどまあ、――日本語がわからないってわけじゃありませんので。

向井、このシーンの最初に置いたノートとペンを示して、退場。

◎占部の場合　2　筆談のシーン

◆映像：以下の筆談の様子がホワイトボードに照射される。

村田　（筆談）はじめまして。村田玲奈と申します。

占部、筆談には答えず。（※その紙をくしゃくしゃにして捨てる？　紙飛行機でも作る？）

占部　やらねえよそんなことは。やらねえ。

間。

占部　なんなんだようっとうしいな。帰れって。帰れ。か・え・れ。

占部、ジェスチャーで村田に帰るように促すが、村田はうまくその意図をつかめない。

占部　もう大っ嫌いなんだあたし障碍者とか。なんなんだよ。

占部、筆談をする。

占部　（筆談）死ね。っていうか死ね。もしくは――死ね。

村田　（筆談）あなたと話が出来てうれしいです。どうもありがとう。

占部　――脳みそ腐ってんなこの女。

場面転換。

【3】 刑務所から遠く離れて

◎株式会社キョウセイ・リンク　1　指導

事務所。
遠藤と有島がいる。

遠藤　まあ、うまいやり方とは言えないよね、少なくとも。
有島　――はい。
遠藤　反省反省って押しつけちゃってさ。これじゃ今までの日本のね、法務省直轄時代となんにも変わらないじゃない？　でしょ？
有島　――はい。そう、――すみません。
遠藤　肝心なのはだから、――彼の自主的な反省っていうかさ、そういうアレなんだから。まずはあなたが「受容」のスタンスから入らないと。
有島　はい。
遠藤　録音聞いてたらもう、すぐ反論しちゃってさ。ぜんぜんダメなんだよ、そういうことじゃ。
有島　ちょっと自分も冷静さを失ってまして。
遠藤　★いやいやいや（笑）　冷静にやんの。仕事なんだから。――でしょ？
有島　はい。
遠藤　「統制された情緒的関与」、これ基本でしょ？
有島　統制された情緒的関与。
遠藤　そう。あと、善悪の判断をしない。これも鉄則。何度も言ってんじゃない？
有島　そう、ですね。おっしゃる通りです。
遠藤　うん――。

一拍。

遠藤　じゃあ、ちょっと肝心なこと一個教えといてあげるけどね、
有島　はい。
遠藤　「待つ」っていうことだから。
有島　待つ。
遠藤　自分の常識っていうかこう、価値観？　みたいのをさ、押しつけたくなっちゃうのをグッとこらえて。――受刑者からの内発的な成長を待つ、ていうさ。
有島　はい、待つ。
遠藤　自己決定力をつけてあげなくちゃいけないわけだから。わかんでしょ？
有島　そうですね。はい。心がけて。

遠藤　だからなに――あなたも出来る人だとは思うからさ。それだけ忘れないで。あー、書類だけちゃんと、まとめといてね。
有島　あ、はい。明日中には必ず。
遠藤　★いやいやいや――。今日今日。
有島　今日？＝
遠藤　＝今日だよ。伸ばしてってもしょうがないんだから。ね？　気合いれて、今日中に。
有島　でも今日は、こないだの立花さんの分を先にやっちゃおうかなって。
遠藤　★だからあれも今日だよ。できるでしょ、二つくらい？
有島　ああ、はい。じゃあ、今日中に。
遠藤　おう。――気合な！
有島　はい。

遠藤、退場。

向井　所長には確かに営業力てものがあって、僕ら派遣のメンバーも含め、仕事が無いって状況になることはまあ、無かったわけですから。本当にそれは、ありがたいことだったわけです。

◎株式会社キョウセイ・リンク　2　通話

有島、電話をする。

向井　はい？
有島　ああ、向井くん？　今、大丈夫？
向井　うん。大丈夫じゃなかったら出ないでしょ。
有島　ああ、だよね。
向井　今、ちょうど面談終わってレナちゃんと休んでるところ。［（村田に）有島さん。
村田　ああ。
有島　［あーそうなんだ。
向井　なにどうしたの？
有島　うん。ちょっと今日も遅くなりそうだからごはん先食べてて、と思って。
向井　ああ、わかった。って事務所戻ってくんでしょ？
有島　うん。
向井　どうせ会うじゃんそしたら。
有島　ああ、そうだったね。そっか。
向井　――どしたの？　なんか元気ないじゃん＝
有島　＝ええ？　そんなことないけど。
向井　ふーん、そう？　ならいいんだけど。

有島　え、誰と一緒にいるの？
向井　ん？　レナちゃんだよ。ホラ、現場一緒だったから今日。
有島　あ、そう。じゃあ、ちょっと代わってもらえる？
向井　ん？　なんで？
有島　えー、ちょっと確認したいことがあって、仕事で。
向井　あ、そう？　――（村田に）ちょっと代わってほしいんだって。
村田　（電話を受け取って）え、あたしですか？＝
向井　＝そうそう。
村田　あ、もしもし、お疲れ様です村田です。
有島　ああ、レナちゃん？　お疲れ様ー。
村田　はい。どうも。お疲れ様です。
有島　（明るく）どうよそっちは？　うまくいってる？
村田　ああ、はい。――いろいろ向井さんに助けていただいて。
有島　ああ、そう？　わかんないことあったらどんどん聞いちゃっていいからね。遠慮なくさ
＝
村田　＝はい。
有島　まあ、――そんなに頼りになるかどうかわかんないけどね＝
村田　＝いやいや！　そんなそんな、
有島　最初は大変だろうと思うけどさ。うん。がんばってね。
村田　はい。ありがとうございます。
有島　うん。じゃあ、それだけだから。ごめんね。
村田　ああ――え？　じゃあ、電話戻します？＝
有島　＝いやいや、大丈夫。よろしく言っといてー。
村田　あ、はーい。失礼しまーす。

電話切る。

◎株式会社キョウセイ・リンク　3　一服

向井　なんだって？
村田　え、なんかちゃんとやれてる？　みたいな。そういう感じでした。
向井　ふーん。なんだろうね？
村田　えー、心配してくれてんじゃないですか？　普通に。

一拍。

村田　でも忙しそうですよねえ。担任になっちゃうと。
向井　すぐなるよ、村田さんだって。

村田　やー、あたしはまだ。ペーペーですから。
向井　俺だって経験豊富ってわけじゃないよ。
村田　えー、だって向井さん「リンク」の事業所の中では一番長いですよね？
向井　ま、そうだけど。
村田　ベテラン、ベテラン。
向井　いや、もっとちゃんと勉強した人じゃないとさ、ホントは派遣がやってる時点でおかしいんだから。
村田　いや、正社員もそんなちゃんと勉強してるわけじゃないですけどね。
向井　有島さんみたく優秀な人材ってんなら話は別だろうけど、
村田　ああ、有島さんはねえ。――ホントだったらこんなとこいるような人じゃないですもんね？
向井　元・官僚ですから（笑）
村田　やあ、そんな人と一緒にやってるってだけで、お腹いっぱいですよ。
向井　なに言ってんの、あなた正社員でしょ。
村田　や、そうですけどそうですけど、
向井　有島さんだって派遣なんだから、肩書的にはさ。
村田　でもあれですよね、向井さんとこ、よくお二人でこんな仕事やってますよね。
向井　ん、どういうこと？
村田　やあ、なんか大変じゃないですか、ふたりともこんな、
向井　あーでも、――むしろ同じ職場じゃなかったらキツくない？　この仕事。
村田　ええ？　なんでですか？
向井　だって時間もメチャクチャだし、精神的にもね。ある程度わかってる人じゃないとやっぱり。
村田　えー、そんなこと言わないでくださいよ。あたしぜんぜん出会い求めてるんですから。めっちゃ募集中ですよ、今。
向井　まあ、そりゃそうか。――元気だね（笑）
村田　当たり前じゃないですか。女はやっぱ若いうちが勝負ですから。
向井　ふーん（笑）　まあ、悪い事じゃないよな。お盛んなのも。
村田　ええ～？　そんなこといって、聞いてますよ、向井さんだって、コノコノー。
向井　ん、ん？　なになに？
村田　――おめでたなんじゃないんですか？　有島さん＝
向井　＝ええ？　そんなこと無いよ。だって、ええ？　［なにいってんの。
村田　［まあまあ、そんなまだ秘密なんだったら詳しくは聞かないですけど。
向井　★いやいやいや、え？　なんでそういう話になってるの？
村田　――女のカンです。
向井　はあ？＝
村田　＝ま、ま、いいですいいです。言いたくないのであれば。［ハイ、もう、
向井　［いや、無いって、ホントに＝

村田　＝ええ、ええ。じゃあ、そういうことで。はい。大丈夫です。

一拍。

村田　あー、でも、どうなんですかね、今の担当。
向井　ああ、――占部さん？
村田　はい。なんか進み方っていうか。
向井　んー、そりゃ苦戦なんじゃないの。全く反省の色なし。
村田　ですよねー。
向井　筆談作戦でちょっとは進めばいいんだけど。
村田　いやー、でもぶっちゃけ自信無いですけどねあたしは。
向井　そう？
村田　そもそも聞こえてますし、っていう。
向井　あーそれはだから、完全に聞こえてないわけじゃないって設定にしとこうよ。なんかうっかり反応しちゃってもそんぐらいは聞こえてるんだ、みたいなことにしとけばさ。
村田　無理ありませんか、その設定？
向井　ま、バレたらバレたでなんとかするよ。どーせ出てくるわけじゃないんだから。
村田　ええ――。（気持ちを切り替えて）ま、そうですよね！
向井　そうそう！

と、村田の携帯が鳴る。

向井　あ、やべ。遠藤？
村田　はい。あ、でもメールなんで。
向井　なに、なんだって？
村田　や、なんか、「メガネが曇って前が見えない」
向井　どういうこと？
村田　や、つけ麺食べてるとかって。
向井　ああ――。ナチュラルにうざいね。
村田　ねえ。だって写真つきですよ。
向井　いや、拭けよな。写真取ってるヒマに。
村田　ですよね。ていうか、毎日行ってません？　らーめん。
向井　ま、ほぼほぼ。
村田　よく飽きませんよね、ホント。
向井　まあ、結構真剣に探してっからね、あの人は。名店巡りっていうか、
村田　ああ――。向井さんも行ってますもんね、一緒に。
向井　まあ、職場離れちゃえば結構いい人だからさ、あれで。
村田　ああ、そうですか。

向井　でもなに、レナちゃんにもそんな友達みたいなメール来るんだ？
村田　もう、しつこいんですよなんかあの人。
向井　うわー。がんばって。
村田　いや、がんばりませんから。
向井　「今終わったとこなんで帰ります」って返信しといてよ。
村田　あ、はい。了解です。

ふたり、退場。

遠藤　この頃は彼も有島さんもとにかく疲れてたみたいです。毎日ぐったりしているような、そんな時期だったようで――。とはいえ、それでも次の日は容赦なくやってきてしまうわけで、彼も「りっちゃん」もまた、翌日は朝から仕事なのでした。

場面転換。

【4】一途な恋／夫婦の形

◎株式会社キョウセイ・リンク　4　朝礼

どこやらの会社のオフィス。
上司らしき男（遠藤）がみなの前に立っている。

遠藤　はい、号令。
村田　おはようございます！
社員　おはようございます！
遠藤　あい、おはよー。てなことなわけでね、我々もまあ頑張っていかなくちゃいけないな、って思ってるわけなんですけどね、ええ、おい。そうだろう村田？
村田　あ、はい。そうですね。
遠藤　そんじゃま、今日もよろしくよろしくよろしくゥ！
社員　はいっ！
遠藤　おうおうおう、ひとーつお前らに今日も言っておきたいことがあるんだけどな――気合な！
社員　はいっ！

三人、それぞれに出勤準備。

向井　僕らは毎朝、それぞれの現場に出勤する前に一度、「キョウセイ・リンク」のオフィスに顔を出すことになってました。別に何をするってわけでもないのにわざわざクソ早い時間に集まって、またもう、来なくてもいいのに毎朝やってくる所長がそれに参加して、形ばかりの朝礼をやるわけです。それからそれから、
村田　よーやくのことで、
向井　メンバーはそれぞれの現場に出勤するわけです。
社員　行ってまいります！
遠藤　ウーイ

出勤風景。
場面転換。

◎門田の場合　4　被害者遺族との面会　第一回

門田の面談室。
門田と一人の女（佐野）がいる。有島が傍らに立っている。

長い間。

佐野　無いんですか、なにか？
門田　え？　はい？
佐野　あなたの方からはなにか？
門田　僕の方から――。

間。

門田　特には。

一拍。

門田　あ、ええと何でも。あの、言っていただいて結構ですんで――いろいろ、言いたいことを言っていただくっていうか、あの、あると思いますので。
佐野　――私？
門田　はい。もうなんでも、言っちゃってください。
佐野　――なにを？
門田　＝なにを？　んー、なにを？
佐野　何を言うんですか？　私が。
門田　んー、たとえばですか？　――たとえばだから、うーんと――。あの、だから、許さない、よ、とか、忘れるなよ、みたいな。は、反省、反省、してる、のか、みたいなこと、とか。

一拍。

佐野　それを言うの？
門田　いや、えーと、うーん、わかんないですけど、だから、そうじゃないのかもしれないですけど――えーと、そうじゃない、ですか。
佐野　私からはありません。
門田　――はい。
佐野　あなたからは？
門田　――あの＝
佐野　＝ええ。
門田　ちょっとわからないです。あの、――考えてるんですけど。ちょっとわからない。

佐野、持参した封筒から中に入っている手紙を取り出す。

佐野　それじゃ、あたしからってわけでもないんですけど、あなたに会いたがっている人から伝言を預かってますんで。
門田　はい。

間。

佐野　ウチの家族だってもちろん言いたいことはあるんですけど、でも、今、ウチの中はメチャクチャです。あなたのせいで。

一拍。

佐野　お母さんは一日中横になっているし、お父さんはお母さんが自殺しないようにずっと見張っています。誰も笑いません。あの日から毎日、ずっとずっと、生きていくだけで必死です。
門田　――はい。
佐野　一応、私は被害者の親族ということであなたに会う権利があるわけなんですけど、あなたと会いたくても会えない人も沢山います。あなたと違って、あの子にはたくさん友達がいたわけですから。
門田　はい。
佐野　今日はそういった人から預かっている言葉を読みます。いいですか？
門田　あ、はい。お願いします。
佐野　（手紙を読む）「とにかく早く死んでくれ。人を殺したんだからお前にも生きる権利なんか無い。むしろまだお前が生きている理由がわからない。意味がわからない。どうか一日も早く死んでくれ」――以上です。

間。

佐野　何か言うことはないんですか？

間。

佐野　優奈を本当に好きだった人たちに対して、あの子があの子であるために必要だった人たちに対して、何の興味も無いんですか？

間。

佐野　じゃあ、帰ります。

佐野が席を立つ。

有島　（門田に）ごあいさつ――。

門田　はい。あ、あの、ありがとうございました。

有島　★立たなくていいからあなたは。

間。

佐野、有島、退場、

門田、着席する。

◎門田の場合　5　親族、面談

有島　今日はお忙しいところわざわざお越しいただきまして――。

佐野　ええ。

有島　門田なりにその、反省の気持ちっていうのが少しづつ出てきているとは思うんですけど、――現にその、ご遺族の方との面会以外にはその、誰とも会わないですし、でもあの、なかなかそれがまだ言葉にはならないと申しますか。

佐野　★出てくるんですよね、あの人？

有島　――はい。そう、ですね。時が来れば＝

佐野　＝無理じゃないんですか？　あれじゃ。

一拍。

佐野　何もわかってないと思いますよ。

有島　はい。ですので、我々といたしましてもその、全力で、そういう彼がその、少しでも理解できるように、支援を続けていきたいと思っておりまして。

佐野　いいですね、人を殺して支援までされて。

一拍。

佐野　欠けちゃってるんじゃないんですか？　なにか人として必要なものが無いと思いますよ、あの人。

有島　できるだけのことはさせていただきたいな、と思ってはいるんですが。

佐野　私が殺したらダメなんですよね。やっぱり。

有島　――彼を？

佐野　――他に誰か？

有島　それはあの、――ダメです。

一拍。

佐野　所長さん、どちらでしたっけ？

有島　あ、そちら突き当りのすぐ右に――あ、ご案内させていただきます。

佐野、有島、退場。

しばしの間。

有島、門田の居る部屋に戻ってくる。

◎門田の場合　6　続・愛と殺人の言い訳

有島　今日はまだ、初めての面会ですから。

間。

有島　ずうっと黙ってたわけじゃないんだから上出来ですよ。最初の一回としては。うん。がんばってたと思いますよ。

間。

有島　何度も繰り返しお会いして少しづつでも、――ね？　門田さんの気持ちを伝えていけるようになっていきましょう。ゆっくりでいいですから。

門田　どうすればよかったんですか？　僕は。

有島　ん、どうっていうと？

門田　彼女を愛するのをやめればよかったんですか？　次の人を愛せばよかったと？

一拍。

有島　まあ、そういうこともあったんでしょうね。もっとその、別の形のアプローチっていうか――あったんじゃないかなあ、と思いますよ。

門田　ダメだとわかったら「ハイ次、ハイ次」といって誰かれ構わず愛すればよかったって言うんですか？

有島　いや、そうは言わないですけど――あなたのやり方にも反省すべき点があったんじゃないかなっていうことを／

門田　★ありません＝

有島　＝や、――あるでしょう、それは。

門田　ありません。あれ以外なかったんです。僕ができることは。

有島　だって、えーと、なんですかその、たくさん無言電話をかけてみたりとか、一日に何百通もメールを送ってみたり、あと、インターネットでもいろいろ書き込みをしているわけでしょう？　あちこちに書き込みをして、それで彼女はだんだんと追い詰められてしまったわけですよ。それは、反省しないと。

門田、咳き込む。

有島　彼女のマンションに乳酸菌飲料を届けたり、――ええと「ピルクル」、「ピルクル」を届けたりして。彼女のバイト先にも「ピルクル」、実家にも「ピルクル」、しかも毎日二本づつ。人はそんなにピルクルを飲みません。

門田　好きだったんです、あの人が／

有島　★届けなくていんですよ、だからって。

門田　でも、なにかできないかなって。なんかあるだろうって／

有島　★それは門田さんの仕事じゃありません＝

門田　＝でも――彼女は誰にも似ていません。彼女は、彼女だけの個性を持っています。僕はそれを愛した。だから彼女の代わりなんていないんです。見つかりません。僕にとって、彼女はそれぐらいスペシャルな存在だったんです。

有島　それはご家族にとってもそうでしょう？

間。

有島　彼女には彼女の人生があった、そうは思いませんか？

門田　思います。

有島　だったら、彼女の好きなようにさせてあげなくちゃ。彼女はだって――なんですか？　試験にも合格して、保育士としての就職先も決まってらした。卒業すればいよいよこの、「なかよし保育園」での勤務が始まると、そういう時だったわけですよ。

門田　彼女の理想の人生に僕が登場しなかったらどうするんですか？

有島　「理想の人生」？

門田　そうです。彼女のやりたいようにやる人生――。でも、そこに僕はいない。どうするんですか？

有島　だからその――諦めなければいけない部分もあったんじゃないですか。

門田　諦めました。

有島　★諦めて無いじゃないですか？　あなたはだんだんと彼女の生活空間をおびやかしていって、次々にピルクルを送りつけた／

門田　★誤解です、そんなことは。いや、ピルクルは確かに送りましたけど、

有島　★それですよ。

門田　★でも、こんなのは全然僕の理想とはかけ離れています。僕だって彼女とずっと一緒にいたかった。それだけが願いでした。でもそれは受け入れらないと理解した。だから諦めた。

有島　違います、だってあなたは／
門田　★諦めたから殺したんです。――諦めなければ殺しません。
有島　全然繋がらないですよ――。だって、諦めたのであれば彼女から身を引くのがその、なんでしょうか、思いやりというか、そういうものなんじゃないですか？
門田　僕から開放してやるべきだったと？
有島　そう――まあ、そうです。そういう――なんていうか、辛い判断が必要になる時もあります。
門田　わかってますよ。
有島　そうですか？
門田　ああ――有島さんは僕がそんなこともわからない人間だと思っているんですね？　今までなんの苦労もせずにここまで生きてきたと？＝
有島　いや、別にそんなこといってません、
門田　＝人生で妥協した経験が一切ないと思っているんですね？
有島　いやでも、そりゃもちろん、あなたにもいろいろな事があったでしょう／
門田　★僕の彼女への思いはどうなるんですか？
有島　それは――なんとかするんですよ＝
門田　＝なんとか？
有島　だんだんとうまく、――忘れていくように。
門田　僕は忘れたくありません。
有島　その気持はわかりますよ。わかりますけども／
門田　★人は人に忘れられた時に本当に死ぬんですよね？　だから僕は忘れたくなんかない。いっしょに生きているんです。僕の中では。今も。これからもずっと。
有島　だからってその――いや、ちょっとそれは話がズレてますよ、それはだって、うーん――別に忘れろとは言いませんけど、でもそうじゃなくて、――その時、あなたの愛がうまく受け入れてもらえなかった段階で、あなたは彼女から距離をとる必要があったんじゃないでしょうか？
門田　どうしてですか？
有島　いや、だって、優奈さんがそれを望んでいないんだとすればですね、
門田　★名前で呼ぶなっていってるでしょう！
有島　いや、すみませんそれは、
門田　★あの人と離れてしまったら意味が無いんです僕は。「ハイ次、ハイ次」としろと言うんでしょうやっぱり？　僕はそんな人間になってまで生きていたくはありません。あの人のいない人生なんて想像できません。
有島　これがそうでしょう。

一拍。

門田　――はい？＝

有島　＝今、門田さんは彼女のいない人生を生きている。――そうじゃないんですか？
門田　違います＝
有島　＝違いませんよ。だってそうじゃないですか／
門田　★僕は彼女のことを忘れません。だから、生きてるんですよ彼女は。僕とともに、これからも生き続けます。――たとえ遺族の方が彼女のことを忘れろと言ったとしても、僕が覚えていることすら汚らわしいと感じていたとしても、それでも僕は彼女を覚えています。有島さんは愛を拒絶されたことが無いんですか？　有島さんが愛した人は必ず有島さんを愛してくれたんですか？
有島　いや、そんなことはないですよ。私だってそりゃ／
門田　★それで、「ハイ次、ハイ次」とやって生きてきたんですね？　きれーにその人のことを忘れて。あなたにとって大事だったのはその人じゃないんです。そうですよ。有島さんは自分を愛してくれる人だったら誰でもいいんです。相手のことなんかどうだっていいんだ！　だから有島さんはすぐに「ハイ次、ハイ次」って言って乗り換えていけるんです。僕は、そういう人間じゃない！

間。

有島　彼女のどこが好きだったんでしょう？　その、あなたが感じていた魅力というか。
門田　すべてです。
有島　すべて。
門田　はい。

間。

門田　素敵な人でした、本当に。――優しくて。明るくて。くだらないことでもすぐに笑ってくれるんです。ビーバー、ビーバーの顔真似が得意でした。というか、げっ歯類全般、大体レパートリーだったんですけど、
有島　げっ歯類？
門田　ハムスター、ウサギ、リス、ネズミ、ヤマアラシ、とか、まあ、似たようなもんなんですけどね。でも、ちょっとだけ違っていて。
有島　そうですか（笑）
門田　いつも周りのことを考えていて、だけどキレイ事ばっかりじゃない、ちゃんとわがままも言って、すぐに涙を流して、他人のことでも自分のことでも、失敗したら悔しいと言って、成功したらうれしいと言って、笑顔も、泣き顔も、人を憎んで罵っている時でさえ彼女は魅力的でした。
有島　――いい思い出があるんですね。
門田　たくさんあります。僕の人生で起きたすばらしいことのトップ・テンは全部彼女に関係することです。初めて会った時も、初めて二人で中華料理を食べに行った時も、本当に嘘みた

いに――いい――時間でした。僕が彼女のチュニックを褒めて、なんだかすごく照れてくれて、うれしそうにしてくれて、一度なんてあの、彼女が学校で嫌なことがあったんですけど、その、人間関係でちょっとどうとかあったとかで、いろいろと悩んでいて、

有島　ええ、ええ。

門田　その時なんて僕と会って、その、なんですか、「会った」ていうことに感動してなんか、泣いてしまった時があって。なんですか、その、安心して、っていうかそういう、もう――だって、泣かないじゃないですか？　泣きませんよそんな！　それで僕は、だからもう――なんだかよくわからないですけど、なんでしょうその――だから、有島さんも彼女に会ったらきっとわかりますよ。そういうあの、好きになりますよ。

有島　ええ。お会いしてみたかったです。

門田　はい。でも、それはできませんね、もう。

間。

門田　どうして生まれてきたんでしょう、僕は？

間。

門田　僕が生まれてこなければあなたは、有島さんは彼女に会うことができた。生まれてこない方が良かった人間もいるんでしょうか？　でも意地悪ですよねー、世界って！　僕みたいな人間が彼女と出会うようにできている。出会わないようにしてくれたってよかったのに。あんな素敵な人のことをどうやって忘れるんですか？　忘れたくありません。彼女のことを忘れるぐらいなら死んだほうがマシです。ずっと。

間。

門田　彼女は僕なんかいなくても素敵な人です。でも僕は彼女がいなければ生きていけない。忘れることなんてできない。だから、僕みたいな人間は最初から生まれてこなければ良かったんです。僕は誰も恨んでいません。彼女以外の人のことも誰も。だって素敵な人は世の中にいっぱいいるんです。それもわかっています。でも僕は全然素敵じゃない。彼女も言ってましたよ。僕は魅力が無いって。僕が生まれて来ないほうが世界はうまくいってたんです。だったら産まないでくださいよ！　僕が恨んでいることがあるとすればそれです。このすばらしい世界に、どうしてこのすばらしくない僕を産んだんですか？

有島　――生まれてきた方が良かったんです。あなたは。

門田　でも僕を死刑にしたいと思っている人がいる。

有島　それでもです。

門田　★そんなわけないじゃないですか。へー？　どうしてですか？

有島　いや、そんなハッキリどうとかっていう風には言えないですけど――

門田　言えないんじゃないですか！
有島　★でも、――生まれて来たほうが良かったんです。生まれて来ない方がよかった人なんていません。
門田　彼女を殺したのにですか？
有島　――そうならない人生もきっとありえた。
門田　そんなことはありません＝
有島　＝いや、きっとあったんです。
門田　★ありません！　僕はもう一度生まれたらもう一度彼女と会いたい。だけどその時に僕を愛して欲しくなんかありません。だって僕は素敵じゃないから！　魅力が無いから！　そんな人間が彼女に愛されないのは当然です。愛してもらいたいなんて思わない。だけど僕は好きなんです。何度生まれかわっても僕はきっと彼女を見つけ出して、出会って、そして殺します。

間。

と、ここで少し離れた場所にいた向井が鼻歌を歌いながら掃除を始める。

向井　ラララン・ラララン、ラランラ、ルラルラルラルララン――。

門田　だから、僕のお墓は作っていただかないで結構です。僕はどこにも宿りません。天国からこの世界のことを見守ったりなんかしません。いや、もちろん僕は地獄行きでしょうけど、地獄からでも、この世界のことなんて考えません。だからもう二度と生まれかわらないぐらい徹底的に僕を殺してほしいんです。世界から僕だけを消すように、コナゴナにすり潰して海に、いや、宇宙のその、さらに外側にでも捨ててください。

一拍。

有島　宇宙の外は、難しいかもしれないですけど。
門田　大丈夫です。宇宙なんて僕よりも小さい。たった、僕の頭の中だけのことです。
有島　そうですか？
門田　ええ。全部、僕の頭の中のことです。夢を見ているようなものです。全部。人生は。
有島　これは現実です。夢じゃありません。
門田　★わかってますよ！　わかってます。
有島　世界は、あなたの外にあるんです。
門田　ありません！　あったとしても知りません！　僕は知ることができない。僕が知っていることも、僕が想像することも全部、僕の頭の中の出来事です。

一拍。　※このあたりで向井の掃除、鼻歌が終わる。

有島　今日はもうおしまいにしましょう。
門田　はい。そうですね。僕もちょっと疲れました。有島さんも――。

有島、首を横に振る。

間。

有島　ああ、もう――。全然ダメですね、私。あの――もっとちゃんと考えて。はい。もっとちゃんとして出直して来ます。

有島、荷物をまとめて帰る準備をする。

門田　もう結構ですよ。
有島　――はい？
門田　ありがとうございました＝
有島　＝いやいや、また来ますよ、ちゃんと。
門田　言いたいことはもう全部残らずいいました。
有島　そんなこと言わずにまた――。
門田　いえ、僕はもう、永遠にしゃべりません。
有島　永遠てそんな――。

間。

有島　それじゃトイレも行けないじゃないですか。――願います！　用便、願います！　って言わないとほら。おしっこもらしちゃいますよ。

有島だけ少し笑う。

間。

有島　また、来ます。

有島、退場。

遠藤　実際、それからの門田は何も話をしなくなってしまったそうです。ほとんど何も喋ってくれなくなっちゃったって、有島さんはそう言ってました。「それでいいです」とか、「その通りです」とか、そんなことしか言わなくなってしまったって。

場面転換。

【5】　悪とは罪の露見なり

◎ふたりの家　2　いたわり合うこころ

有島・向井の家。

向井　ちょっと痩せちゃったかね？
有島　――ん？　ああ、そう？
向井　やあ、絶対痩せちゃったって。
有島　わかんない最近測ってないから。んー、確かに。そうかもね。
向井　なんか大変そうじゃん、今の人。
有馬　まあ、こういうケースの担任になんの初めてだから。ってのもあるんだろうけどさ。
向井　ほどほどにしとかないと。
有島　うん――。そっちもなんか大変なんでしょ？　終身刑だって聞いたけど。
向井　いや、楽勝だよ。全然。
有島　へー、そう？
向井　だって出てこないんだもん、結局。
有島　ああ。
向井　まあ、罪としてはこっちのが断然重いんだろうけどさ、一生刑務所ん中なんだから。そっちとは重みが違うよ。
有島　まあねまあね。――でも、なんか頭おかしい人なんでしょ？
向井　うーん。結構、まともな気もすんだけどね、話してると。
有島　へー、そう？
向井　うん。だって刑事責任はバリバリにちゃんとあるからわけだから。
有島　人格障害？
向井　だったかな？　まあ、アテにしてないけどね、精神分析とか。
有島　まともなのにそういうアレになっちゃうもんなんだ――。
向井　そりゃまあ、何十人かやっちゃってるわけだから普通じゃないんだろうけどさ。
有島　ヒエーだね。なんかお医者さんみたいなやつだったんでしょ？
向井　お、詳しいじゃん。――なに、誰に聞いたの？
有島　えー、なんか睡眠薬とか打って殺しちゃったって。
向井　そうそう、筋弛緩剤。そういうのどんどん打っちゃって、っていう。
有島　うわあ。
向井　そんで相手がターミナルの老人だったから長いことバレなくて。安楽死殺人ていうの？
　捕まえてみたらもう十何年かそういうことやってたっていう――。
有島　なに考えてんだろうねえ。
向井　それ言っちゃおしまいでしょ。わけわかんない人ばっかなんだから。
有島　だけどさ――。やっぱ医者とかやってると勘違いしちゃうもんなのかね。

向井　んん？
有島　そういう、自分には命をコントロールする力があるっていうかさ。
向井　命をコントロールする力。
有島　うん。いや、びっくりしちゃってさ、あたしもこないだ担任の子と話してて＝
向井　＝ああ、門田くん？＝
有島　＝そうそう。あ、よく覚えてたね。
向井　そりゃりっちゃんの担任なんだから。そんで、なに？
有島　ま、純愛っちゃ純愛なんだけどさー、あの子も。自分の「もの」みたいに考えちゃってるからどっかおかしくなっちゃってて。あの子の場合はホラ、親との関係もいったん壊れちゃってるみたいなところがあるし、
向井　ああ、全然会おうとしないんだっけ？
有島　一切ね。ご両親の方でも投げちゃってるようなところがあるから。
向井　うーん――。
有島　しかもあれだよ、こないだご遺族の方と面会があったんだけどね。
向井　おお、攻めるね。
有島　そう！　ちょっと早かった気がするんだよねー。そのご遺族の方がさ、もう、面会で思いっきり「死んでくれ」みたいな感じのこと言っちゃって。
向井　うあー。
有島　そりゃわかるけどさー。今、それ言っちゃうかー、みたいな。

と、来客を告げるチャイムの音がする。

向井　ん？　誰だろう、こんな時間に。
有島　なんだろね？　はーい、今開けますねー。

有島、退場。

向井　と、まあね。ええ。今から思えば当時の僕はあまりにも無防備に生活していたのかもしれません。仕事が不安定だのなんだのといいながらね、なんとなく、最低限の「安定」ってやつは自分で作り出すことができるし、努力して勝ち取った「立場」ってのは誰かに遠慮無く崩されていくことなんか無いって、そう信じていたんでしょうね。だけど、そのチャイムの音は確かに、僕たちの「夫婦生活」の、ようなものを切り崩し始めたんです。

間。

向井　この時の話はしたくありません。だからこの話は、遠藤さんにしてもらおうと思います。
遠藤　ええっ？　俺？

向井　（無言で頷く）
遠藤　あ、じゃあ、――ええー？　俺？　あ、そう。ええと、状況としては別にそんな複雑なことが起きたってわけじゃなくてですね、簡単に言えば、まあ、有島さんが浮気をしていた、と。というか不倫をしていた、と。で、その有島さんの不倫相手、えっと仮にその人をEさんとすればですね、そのEさんの妻がこの時、おそらくはまあ難しい顔をしてふたりの家を訪れた、と。どうやらそういったことらしいです。

間。

遠藤　あ、もうちょっと話しとく？
向井　（無言で頷く）
遠藤　もうちょっと――はい。えー、そのEさんの奥さんていうのはめっちゃくちゃ腰の低いスタンスでお詫びをしていって、っていっても、もちろん有島さんに対してじゃなくて、向井に対してだけですけど――。Eさんのところはこの特区が出来る前からの夫婦だったみたいなんで、法的にも？　ちゃんとした婚姻関係があったんです。だからまあ、「うちの主人の女遊びで迷惑をかけてましてー、申し訳ありませんー」っていうような？　要するにそういうことをさんざん謝って、で、向井さんもなんか謝って、「スミマセン、スミマセン」とかって言って、なんだかよくわからないですけど二人で頭をさげまくって、どうにかその場は収まった、ってことだったみたいです。――もういいですか？　（向井、頷く）はい、はい。1ひ

一拍。

向井　その日はなんだか話をする気にもなれなくて。一緒に寝るのもなんか違うかなって思って近所のレストランに行きました。本当はビジネスホテルみたいなところに行きたかったんですけど、あいにく近所にはそんなところもなくて。窓際の、カウンター席みたいなところに座ってずっとひとりで、夜が明けるまで深夜のトラックをボーっと眺めていました。

一拍。

遠藤　ふたりは翌朝、まるで打ち合わせしたみたいに早い時間に「キョウセイ・リンク」のオフィスに着いて、そこで初めて、少しだけ昨夜のことについて話をしたそうです。

場面転換。

◎株式会社キョウセイ・リンク　5　一緒にいる理由

「キョウセイ」の事務所。

向井　どうしたいの、君は？

間。

有島　言うとおりにするよ。これはホント、私が悪かったから。
向井　あ、そう？
有島　うん。
向井　――え、本気で言ってるの？
有島　どうして？
向井　いや、なんか普通のこと言うなあと思って。そういうことしといてさ。

一拍。

有島　ごめん＝
向井　＝いや、「ごめん」とかじゃなくて。なんか意外っていうか――。あ、別にそんな怒っているとかではないんだけどね、ま、ここはほら特区なわけだし？　俺もそういうのはわかってここ住んでいるわけだからさ。
有島　うん。そうね。

一拍。

向井　あれ？　どうしたいの？
有島　――あなたは？
向井　俺はまあ、そういう問題がそもそも起こらないで平和にやっていけるといいなあ、と思ってたわけだからね。よくわかんないんだけど。
有島　――うん。
向井　ってあれ？　んん？　あれれ？
有島　なに？
向井　謝るの？
有島　え？　うん。
向井　謝ってどうしたいの？
有島　え、どうしたいって言われても――［え、どうしたいってなに？
向井　ん、ん、ん？　別に「どうしたいの？」ってそんな変な質問じゃないと思うけど。
有島　いや、あなたはどうしたいの？　っていう方が先なのかなって思って。
向井　なに悪いと思っているの？　いいんだよ別に、そんなこと言わなくたって。
有島　うん、でも――。
向井　え、え、え、ちょっと君ん中でこれがどういうことになってるのかよくわかんないんだけど＝

有島　＝いやだから＝
向井　＝うん。

一拍。

有島　結果として＝
向井　＝うん。
有島　こうなってしまったのはだから、――申し訳ないと思ってます。
向井　なにこういうことって？　バレたことが？
有島　いや、それもあるし、――それだけじゃなくて／
向井　★え、じゃあなに、バレなければよかってこと？＝
有島　＝や、そうじゃなくて、だからそういう、――なんだろう。家族のいる人とそういうことになってたってのもよくなかったとは思うし＝
向井　うんうん。
有島　＝だから別に、――向井クンのほうで無理だなってなったらあたしたちの関係も続けられないのかなって思うし。
向井　まあ、別にいいんじゃない。それは。

間。

向井　いや、よくはないんだろうけどさ。よくはないんだろうけど、でも、別にこういうことがあったから止めにしようとか、そういう風には考えてないけど。
有島　――そう。

一拍。

向井　って、え？　だから、おいおーいって（笑）　あなたからなんか言うことないの？
有島　あ、ああ――。あたしはだから、一緒にいてほしいです。
向井　――ああ、そう。
有島　はい。
向井　でもなんかあれだね。こんなこと言わされちゃってる時点でちょっとどうでもよくなっちゃうでしょ？
有島　いや、そんなことはないけど。
向井　じゃあ、いいんじゃない？　そういう事で。

間。

有島　まだ、もうひとつ言っておかなくちゃいけないことがあって。

向井　なに？　――あ、子供か。
有島　え？
向井　――そうか、子供かあ。
有島　いや、あの、
向井　アレ違う？
有島　いや、違わないですけど。って、え？
向井　なるほどねえ。

間。

有島　どうしよっかなあって思ってて。
向井　なにが？　どうしよっかって？
有島　だから産んでいいのかなあって――。
向井　ん？　なに俺が許可を出すわけ？
有島　え、何が？
向井　いやだから、
有島　ああ、産むなってこと？
向井　いやいやいや、言ってないでしょ＝
有島　でも、
向井　＝別に勝手にすればって感じだけどね。

有島、絶句する。向井、笑う。それを見て、有島も少し笑う。

向井　いや、さすがに冷たいかもしんないけどそれは＝
有島　＝いやいやいや。
向井　え、え、なに、君はどうしたいとかあんの？
有島　ああ――ま、あなた次第っていうか。向井クンのアレかなって思っているけど。意思っていうか。
向井　え、ぶっちゃけさあ、どっちの、とか、どうなのそのへんは？　なんか君的には予想っていうか、無いの？

一拍。

有島　ハーフハーフかな。

向井、笑う。

向井　あ、そう。

有島　うん。
向井　避妊しろよ、どっちかとは。
有島　ですね。
向井　ですねじゃねえよ。アホか。

と、そこへ村田、登場。

村田　あ、おはようございまーす。
向井　［おはよう。
有島　［おはよう。
村田　もういらしてたんですね？　あー、なんかあの、郵便物届いてるんですけど、押しちゃっていいですかハンコ？
有島　ああ、誰から？
村田　あーごめんなさい、ちょっとわかんないですけど、
向井　まあいいよ。受け取っといて。
村田　あ、はい。じゃあ。

村田、退場。

有島　早いねレナちゃん。
向井　いや、もうそんぐらいでしょ。ぼちぼち。

間。

村田、戻ってくる。

村田　なんか佐野さんって人からでしたけど、荷物。［わかります？
有島　［あー、それ、あたしだ多分＝
村田　そうですか？
有島　＝そうだそうだ。今の担任の子が、相手方、佐野さんだから。
村田　こっち持ってきます？　すっごい重たかったんで置いといたんですけど。
有島　いーよいーよ。あとで見とくから。
村田　すみません――。あたしもいいですか、ちょっと？
向井　どうぞ。

村田、二人のそばに腰掛ける。

村田　だあ――。早いっすね、お二人とも。
有島　レナちゃんも早いじゃん。どうしたの？

村田　いや、あたしいつもこんなもんすよ。なんか朝バタバタすんの嫌なんで。
有島　［ああ、そう。
向井　［というかさあ、あの、――せっかくだからレナちゃんにも聞いて欲しいことがあんだけど、
村田　はい。なんですか？
向井　当たってたわ、こないだレナちゃんが言ってたやつ。あの、なんかおめでたとか言ってたじゃん。
村田　あ、やっぱりそうですよね！　えー、おめでとうございます！

間。

村田　って、あ――ん？　なんか――。
向井　（村田に）え、それってさ、誰から聞いたの？
村田　えーとまあ、噂で？　［なんとなく。
有島　［いや、あの、――こないだちょっとそんな話になって。
向井　ああ、そう？　（村田に）え、そうなの？
村田　はい――なんかあの、軽く、お話を伺って＝
向井　ふーん。
村田　＝っていっても全然あの、ホント軽くですけど。
向井　どう思う？
村田　ど、どう思う？　どうって申されますと？
向井　いや、産むべきかどうかって話なんだけどね。悩んじゃってちょっと今、二人で、な。

間。

村田　んーと、ちょっと空気読めてないんですけど、え、なんか問題あるんですか？
向井　（有島に）どうなの？
有島　いや――ここでする話？
村田　あ、ですよね。なんも問題なかったらこういう感じじゃないですよね。
有島　［まあね・まあね、
向井　［いや、なんかさあ、誰の子だかわかんないっていうんだよ。
村田　あ、へえ――／
有島　★だからハーフハーフっていってんじゃん。誰かわかんないってことはないよ。
向井　★そうそう！　ハーフハーフなんだって。だから俺とその――その人と。ハーフハーフだっていうんだよ、この人。

一拍。

村田　これ間違いなくあたしが口を出しちゃいけない案件ですよね？
向井　そう？
村田　はい。ていうか、むしろなんでその話をされちゃってるのかな、今。
有島　ほんとだよね。ごめんね、なんか。
村田　［いえいえいえ。
向井　［いや、それはわかってんだけどね。ま、あえて？　ちょっとあえて聞いちゃえと思って。勢いで。
村田　勢いって――。
向井　いや、正直ちょっとこれ冷静なのか俺？　みたいなとこはあんだけど今＝
村田　ええ、ええ。
向井　＝え、どう思う？　いや、あくまでも参考意見としてだから。ね。どう？
村田　――なにを言っても損をするような気が＝
有島　＝だよねえ。
向井　いや、そんなこと無いよ。困っちゃってるって話なんだから、単に。
村田　え、それはあれですか、なんか、別れちゃおっかなー的な話に発展するかもってことですよね、お二人が？
向井　ま、そういう可能性はあるんじゃない。
村田　じゃあ、アレじゃないですか、あの、もうすっごい無責任に言いますけど、――ＤＮＡ鑑定とかしちゃえばいいんじゃないですか？　って、うわ、踏み込んだあたし。ってあれ？　出来ないんでしたっけそういうのって、生まれる前とかって？
向井　いや、出来ると思うけどね。だから、してもいいんだけどねもちろん。あ、なるほどね。
村田　はい。
向井　なんせ話が急だったからさあ――。いやね、ちょうどこの人がなんか、もう一人つきあってる人がいるんですけどォ、みたいな話があって、それとセットでっていうか。
村田　ああ、ああ、ああ。
向井　どうするどうする、みたいなになってる時に子供の話が出てきたからさ。
有島　あとで言ったらもっと悪いでしょ。
向井　だったら昨日言えばよかったんじゃない？
有島　言えなかったじゃん、昨日は。
向井　言えなかったじゃん？　なにそれなにそれ、［全然意味わかんないんだけど。
村田　［っていうか、ちょっ、ダメですよね、あたし、この話聞いてちゃ？
有島　［［いや、ごめんねごめんね。
向井　［［うーん。まあ、ちょっと、動揺してるんだよ、今＝
村田　＝ですよね、ですよね。なんか、そんな感じなんでしょうけど。
向井　むしろこうなっちゃったらこの会社続けていけんのかって話も出てくるしなあ。
村田　あー、え、そういう話に［なっちゃうんですか？
有島　［いや、でも、――辞めるならあたしの方が辞めるから。

向井　＝ん、ん、ん？　なに、その言い方？　［ちょっとおかしいでしょ＝
有島　［は、え？　何が？
向井　＝どういうつもりでいってるのかわかんないけどさ、［そういう言い方はさ、
有島　［や、だって普通にそうでしょ。どうせ辞めるっていう話になるんだったらね、
村田　★あ、あ、あ、あのー、ちょっとあたし電話が、かかってきたことにします。なんか、
あ、電話だー。

村田、退場。
間。

有島　なんなのやめてよ。
向井　辞めるならあたしがとかって言ってたけどさ、それ、俺の決めることなんじゃないの？
有島　そうかもしんないけどさ。
向井　ていうか、する？　鑑定。そっちのが問題でしょ。
有島　うーん。
向井　あ、でもあれか。いずれにせよ二択だもんね答えは――。ん、違うか。

と、向井席を立ってホワイトボードに以下の説明に使用する図を描く。

向井　俺の子かそうじゃないかっていう二択があって。で、そっから、産むか産まないかの二択があるのか。
有島　――四択だね＝
向井　＝四択だね。
有島　ま、だから鑑定までしたら一応、二択までは絞れるんじゃない？
向井　え、でもさ、結局、選択肢は限られてるわけでしょ、その、それぞれの場合にどうするかっていうのは先に考えといたほうがいいんじゃない？
有島　そう？
向井　だってほら、いずれにせよ堕ろすってことになるんだったら、しなくていいわけでしょ鑑定なんか？　断固拒否、ってことだっだらさ。
有島　ああ――。

向井、ホワイトボードを離れて元居た場所に戻り、

向井　いや、もちろんそれはあなたが決めることなんだけどね。
有島　いや、あたし一人で決められることじゃないじゃん。
向井　え、じゃあなに俺が堕ろせって言ったら堕ろすわけ？
有島　――とは言ってないけどさ。
向井　そうなんじゃんやっぱり。

有島　ってなに、やっぱ堕ろした方がいいってこと？　［て、いうことを言っているんだよね？
向井　［いやいやいや、――んー、なんだろう。その聞き方がもうさ、なんかズルい気がすんだよね俺は。
有島　は？　なにがズルいの？
向井　ええ、なんか――。ま、その質問も白々しい気もするんだけど。
有島　――なに？
向井　だってあれでしょ、俺の子じゃないんだったら関係ないわけでしょ？　俺次第っていうのはおかしくない？　ていうかあれか、あーなに？　「どっちにしろ俺は育てるぜ」みたいな、「たとえ俺の子じゃなくても」みたいな、そういうスタンスだったらあらかじめ言ってといてくれってことなの？
有島　今は止めようよ。職場じゃん。
向井　はあ？　お前が言い出したんだろ。

間。

村田　えーとあの、なんか今朝、来ないみたいですよ、遠藤さん。（ホワイトボードに気づいて）なんですか、これ？
向井　ん？　図。
村田　（うなずいて）ああ、図。
向井　なんか言ってた？
村田　え？　ああ、別に何も言ってないんですけど＝
向井　そう。
村井　＝なんか電話してみたら、ちょうどいいや、みたいな感じで。俺、今日、行かねえからって。風邪――ですかね。
向井　さすがに気まずかったんじゃないの。
村田　気まずいって、何がですか？

間。
村田、有島を見る。目が合って、有島、目を逸らす。

村田　コーヒーでも飲みます？　おふたりとも？
有島　あ、お願いしてもいい？
村田　はい。あ、じゃあ向井さんも？
向井　いや、俺は先、行くわ。
村田　あ、そうですか？　ていうか早くないですかだって？
向井　だって朝礼無いんでしょ？　だったらどっか店行くわ。
村田　あ、あたし、出ましょうか？　そしたら。ね、その方が――。

向井　いい、いい、いい。ごめんね、なんか。気ィ使わせちゃって。
村田　いえいえ――。
向井　そんじゃまあ。

向井、退場。

村田　ミルクとお砂糖どうします？
有島　やっぱいいやコーヒー。
村田　はい。

村田、コーヒーを淹れる。

◎株式会社キョウセイ・リンク　6　村田と有島

有島、ホワイドボードの図を消しながら、

有島　いや、ごめんねホント。朝から嫌な気分にさせちゃって。
村田　いーですいーです。なんかちょっとびっくりしましたけど。
有島　レナちゃんだってなんかこれからね、気まずくなっちゃうじゃんね。
村田　いや、大丈夫ですよ、それはホント。
有島　場所柄わきまえてほしいよね。
村田　あーでもどうせもうじき辞めますんで。
有島　え？　誰が？
村田　いや、あたしがですけど。
有島　え、え？　なんで？　なんかあったの？
村田　いや、別になんもないですけど――なんか向いてないのかなって。
有島　でも、え？　せっかく正社員なのになんで？
村田　なんでってこともないんですけど――すごい顔してますね。や、なんかこの仕事って結構自分の考えっていうか、そういうのが必要になるじゃないですか？　何が正しいとか、そういうの自分で持ってないとできないっていうか。
有島　そだねえ。
村田　あたしそういうの無いんで。
有島　無い？　［無いってことは無いでしょ、
村田　［いやいやいや、そりゃもちろん、個人的にはありますけど、だってわかんないですもん、ヒトの心なんか。別にわかりたくもないし。っていう、はい。だから。
有島　え、いいんだよそんなの個人的に持ってれば。と、思うけどねあたしは。
村田　そうなんですけどね――んー、なんだろう、あたし少年院入ってたんですよ、昔。
有島　え？　――え？

村田　でも、あれですよ――（有島に対して指摘して）顔、顔。確かに前科・前歴のある人間はこの仕事にはつけないらしいですけど、でも、少年院はあの、そういうの残んないんで。
有島　待って待って待って、ホントに？
村田　はい。そんであそこあがった後ですっごい勉強して、一応大学はそれなりのとこ行けましたし。あとはだから、苗字変えて引っ越してーってしちゃえば――そうなんです。残んないんですよ。
有島　あー、へー。
村田　ホラ、「キョウセイ」って本社はぜんぜんこういうんじゃないじゃないですか？　刑務所行ってー、とか？
有島　まあ、福祉とかそっち系だもんね。
村田　そうなんですよ！　共に生きるですからね。だからこんな仕事んなるとはまさか思ってなかったし、自分のそんな、正義感ていうか、自信無いですよやっぱ。
有島　ふーん。

一拍。

村田　あ、でも悪いことしたっていってもあれですよ、殺人とかじゃないですよ。せいぜい万引きとか、ちょっとあと、悪い人に頼まれて、そういう仕事のお手伝いっていうか。
有島　まあまあ、そういうね、周りがあれだと、若い時は。
村田　そうなんですよねえ。
有島　えーでも、レナちゃんが？　って感じだねえ。
村田　意外ですか？
有島　うん。なんか、びっくりだよ。
村田　いやー、ちっちゃいころとかもう、ずーっと集中力なくってあたし。ソワソワしちゃってて。だから学校でもぜんぜん先生の話とか聞いてらんなくて、めっちゃキョドってたんですよ。で、気がついたらなんか、悪い感じの友達とかと付き合うようんなっちゃってて＝
有島　＝でもぜんぜんそんなことないじゃない？　集中力ないって＝
村田　＝それは鍛えられたんですよ。だって聞いてくださいよ！　私語禁止とかって言ってホント作業中ぐらいしかしゃべれないんですよ！　もう、しゃべったら即効個室ですからね。安座ですよ、安座。
有島　アンザ？
村田　ずーっと座ってんです。こうやって。ひとりで。
有島　んー――いろいろあったんだあ。
村田　そうですよ。あ、ホラ、なんか今あたしもいろいろ聞いちゃったから。おあいこです。
有島　いやいや別に、そんなビッグなお返しはなくて良かったんだけど、ああ、そう――。
村田　はい。

間。

有島　でも勿体ないね。辞めちゃうんだ――。
村田　だってこの仕事って結構、自由にやっていいよ、とかってみんな口では言うじゃないですか？　自分で考えろ、みたいな。
有島　はいはい。
村田　けど本当に自由にやると絶対怒られるし。で、あたし思ったんですけど、それって結局、その人が考えてる「自由」の中でやれってことなんだなあ、って。そういうのなんか面倒くさくなっちゃって。なんでもっとガツンと命令してくれないんでしょうね？　そしたらあたし結構いい仕事すると思うんですけどね、と思って。
有島　そうかあ。
村田　だから合ってたんですよ少年院。ホントなんでも言ってくれるんで、あの、手の挙げ方とか、角度とか。そうなんですよ、「はい！」って返事する時には語尾が長いとか短いとか、そんなことまでちゃんと先生が実演して、やって見せてくれるんです。そんで初めて、なるほどって思って。そっから成績めっちゃ良くなって。――って、引きましたよね絶対、こんな話？
有島　いやいや、別に引くとかはないけど――。へーって感じ。なんかホラ、いっつもニコニコしてるし？
村田　あ、これもだから教わったんですよ。笑う時にはこうやって口を上げて、って。
有島　あ、そう――。
村田　それまではまったく笑わない子だったんで。
有島　今のあなたから想像できないね。
村田　へー。やったあ。
有島　え、え、なんかあるの？　次にやりたいことっていうか。
村田　や、別にそういうのがあるわけじゃないんですけど。
有島　向いてないからってこと？
村田　ですかね。はい。あ、でも有島さんと会えたのはすっごい大きかったですよ。ちょっと満足したっていうか。
有島　あたし？
村田　はい。だって有島さんって元・官僚じゃないですか？　なんかあたしも来るとこまで来たな、みたいな。
有島　ああ――。

間。

有島　でも辞めない方がいいよ。レナちゃんは。
村田　え？　この仕事ですか？
有島　うん。他にやりたいことがあるっていうんなら別だけど、ホラ組織の中に居るってやっぱ守られている部分があるわけじゃん？

村田　ま、そうですね。
有島　どっかで安心していられるんだよ。ほら産休とかもあるし？
村田　ああ。
有島　こういう派遣とかになって思ったけど、やっぱり不安もあるし、目の前のことに追われちゃうから、実際。
村田　そういうもんですか？
有島　どうせここ辞めたってなんかはやらなきゃいけないわけだからさ。
村田　まあ、まあ、
有島　だったらまず次を考えなよ。そんで、なんかやりたいことがはっきり見えてきたら、そっからやめたって遅く無んだし、ぜんぜん。
村田　んんー、そうかあ。
有島　と思うよ。あたしは。

▼音響:曲in　So That I May Come Back　Town And Country

村田　おー、さすが説得力ありますね、有島さん。
▲有島　いや、だってあたしはとりあえずで辞めちゃってあとでオロオロしたクチだからさ。

場面転換。

◎占部の場合　3　占部と村田

以下、再び筆談のシーン。
占部と村田がいる。

村田　おはようございます、占部さん。本日もよろしくお願いします。
占部　まだ生きてたの？　死ねって言っただろ。
村田　占部さんはどうしてこんなところにいるんですか？
占部　犯罪者だからだよ☆
村田　どんな犯罪者なんですか？
占部　殺人？　自殺幇助？　そんな感じ。
村田　自殺幇助ってなんですか？
占部　ま、要するに殺人だよ。
村田　どうして人を殺したんですか？
占部　屈託がないなお前。
村田　よく言われます。
占部　――どうして人を殺したのか？
村田　教えてください。

一拍。

占部　信念を曲げなかったから。
村田　信念て何ですか？
占部　世の中には死んだほうがいい人間もいる。
村田　それはどういう人ですか？
占部　死にたい奴。もう十分生きた奴。生きている価値のない奴。
村田　そういう奴たちを殺したんですか？
占部　お手伝いだよ☆
村田　どうして死んだほうがいいんですか？
占部　世界を平等に近づけるため。
村田　その人たちが死ぬと平等になるんですか？
占部　そうだよ。
村田　どうしてですか？
占部　――たとえば、
村田　はい。
占部　（イラストを描いて説明する）金持ちの老人を生かすために一日五万円かかるとする。
村田　――しました。
占部　世界にはまだ百円のパンも食べられない子供が沢山いる。
村田　――なるほど。
占部　そういうこと。

一拍。

村田　――絵、要りました？
占部　いらなかったな。

一拍。

村田　占部さんは生きている価値のある奴ですか？
占部　少なくとも、死刑にはならないみたいだ。
村田　良かったですね。
占部　残念でしたね。
村田　残念じゃないです。
占部　ウソだ。
村田　興味ないです。
占部　じゃあなんでここにいる？

村田　占部さんとお話するためです。
占部　興味ないんだろ？
村田　あ、占部さんにじゃなくて。死刑になるかどうかに興味がないんです。
占部　私には興味があるのか？
村田　あ、無いです（笑）
占部　仕事だからここにいる？
村田　そんな感じです。

一拍。

村田　ヒマですね。
占部　ヒマだ。
村田　はじめて意見が合いました。
占部　フフ。

一拍。

村田　占部さんは、生きている価値のある奴ですか？
占部　さっき答えただろ。
村田　答えてません。だって、死刑になるかならないかは制度の問題じゃないですか。行政の。
占部　――うん。
村田　だから、占部さんが生きている価値のあるやつなのかどうか、それはまた別の話じゃないですか。

一拍。

占部　確かに。
村田　ええ。

一拍。

占部　まあ、無いのかもしれないな。終身刑だし。
村田　フフ。
占部　でも、

一拍。

占部　生きていたいとは思っちゃってるんだろうね。

一拍。

占部　こんなさ、こういう状況になったら死にゃいいだろうって思ってたんだけどね。

一拍。

村田　いいんじゃないですか。生きていても。――生きていたくない人が死んじゃっていいのかどうかとか、死んじゃうのを人が手伝ってもいいのかどうかとか、それはわからないですけど。でも、いいんじゃないですかね。生きていたいんだったら。

間。

場面転換。

◎株式会社キョウセイ・リンク　7　向井と遠藤

向井が遠藤に電話をかけ、遠藤がそれに出る。

遠藤　はい、もしもし？
向井　あ、どうも向井です。
遠藤　ああ、おつかれさん。
向井　お疲れ様です。いまちょっといいですか？
遠藤　ああ、いいよ。どうした？
向井　切らないでくださいよ、契約。
遠藤　わかってるよ――。
向井　はい。
遠藤　ん、どういう意味だそれ？
向井　いや、別に。普通に仕事なくなったら困るじゃないですか。
遠藤　そんなことはしないよまさか。
向井　どうでしょう。
遠藤　そりゃ君が続けてくれるんなら、ぜひそうしてもらいたいと思ってるよ。うちで一番のベテランなわけだし。
向井　ええ、ならいいんですけど。
遠藤　だけどまあ、人事については私一人で決めているわけじゃないからさ、それこそ「キョウセイ」の本社とも、そう、「ニンゲン」の方とも相談しないといけないわけだし、なんとも断言はできないけど、
向井　有島さんもですか？

遠藤　もちろん、そうするよ。そうするつもりで動く。これはまあ、私の責任だから。
向井　ホントですよ。
遠藤　うん、これはだから、申し訳なかったと思ってる。すまなかった。
向井　謝って済むことと、謝っても済まないことがあるんですよ。
遠藤　そうだね。
向井　はい。
遠藤　だからなんというか、君からの信頼は永遠に失ってしまったものと思ってるよ。
向井　いえ、そうじゃなくてですね、これは謝って済む部類の話ですよ。だって遠藤さんは別に刑務所にぶち込まれるわけじゃないですよね？
遠藤　それはそうだけど――／
向井　ここは特区ですから。別に浮気も不倫も法律上は存在しない。誰が誰となにをしようが、なんの問題もないわけですよ。違います？
遠藤　うん、だけど人としての問題というのはあるだろうからさ、それはもちろん僕のほうで認識しておかなくちゃいけないことだとは思っているよ。
向井　え、悪いと思ってるんですか？　いいんですよ別に。悪いと思ってなくてやったなら、それはそれでスジ通ってるじゃないですか？
遠藤　いや、だから、悪いなとはもちろん思っていたよ。
向井　え、じゃあなんでやるんですか？

間。

向井　ん？　やめてくださいよそういうの。ちゃんと言ってくださいって。俺は悪いと思ってなかったって。そしたら僕も納得できますんで。上司としてこれからも尊敬して、つきあっていけるなあって思いますから。
遠藤　すまなかったよ。
向井　いや、そうじゃなくて、あれ、聞いてんのかな人の話――。え、悪くないと思ったからやったんですよね？　じゃあ、そういってくださいよ。そういってくれなかったら呑気にラーメンなんか行ってる場合じゃなくなりますよ、俺だって。
遠藤　いや、君が言ってるのがどういう意味なのかちょっと／
向井　だから言ってくださいって。「俺は悪いことは何もしてない」ってちゃんとそう言ってくださいよ。
遠藤　いや――。
向井　ほら、早く。言ってくださいよ。

間。

向井　どーぞー。

間。

向井　なんすか言ってくださいよ。いいですか？　行きますよ？　さん、はい！

遠藤　俺は、悪いことは何もしてない。

向井　ハイよくできました。ありがとうございます。――すみませんね、なんか言わせちゃって。

遠藤　いや、まあ、それは構わないけど。

向井　あー、だからあれですよ遠藤さん、これからの遠藤さんに大切なことがありますからよく聞いといてほしいんですけど。

遠藤　うん。

向井　気合です。

向井、電話切る。

遠藤、すぐに電話をかけ直す。

◎株式会社キョウセイ・リンク　8　更新せず

その電話に有島が出る。

有島　はい、有島です。

遠藤　ああ、もしもし。あのー、遠藤だけど。

有島　はい。遠藤さん。

遠藤　あのー、君あれだよねその、今月で一応、契約の区切りが来るよね。

有島　はい。なんですか？

遠藤　いやだから、三ヶ月目だからその、今月で契約切れるでしょ、一回？

有島　えー、ああ、はい。

遠藤　あれ、あのー、申し訳ないんだけどさ、あのー、更新はないっていうことになったから。

有島　――はあ。

遠藤　いやあの、僕はね、あの、反対したんだけどね。いや、もちろんその、今回の僕らの間のことって言うのは一切関係なしにね。それはもう、本当に信じてもらうしか無いんだけども。

有島　はい。

遠藤　上のほうでその、なんていうんだ、そういう人事が、決まってしまってるみたいだから。いやあの、打ち切りになってる現場も何個かあるみたいだから今、「キョウセイ」の本社としても厳しいみたいでさ。誰か一人は切らなきゃいけないってことになってたんだよ、以前から。

有島　村田さんがあの――。

遠藤　うん、村田さんが？
有島　こないだなんか、あんま続ける気ない、みたいなこと言ってましたけど。
遠藤　あ、そうなの？
有島　まあ、そんなはっきりってわけじゃないですけど。
遠藤　んー、でもまあ、彼女は本社からの出向で来てる子だからさ、別に俺がどうこうってい
　う問題でもないんだけどね、当然。
有島　ああ、はい。
遠藤　うん。
有島　じゃあ――わかりました。それはしょうがないですよね。更新の話はまあ、よくあるこ
　とですもんね。
遠藤　そうなんだよ。うん、ホントに申し訳ないと思っているんだけどね。
有島　★いえいえいえ。それはもう本当にしょうがないことですから。
遠藤　うん。だから、残り僅かになっちゃうんだけどさ、ちょっとあの、がんばってよ。有島
　さんも。
有島　あ、はい。がんばります。え、それだけですか？
遠藤　ま、あとはそのーなんだ、それだけだね。
有島　――じゃ失礼しまーす。
遠藤　あい、おつかれさーん。

有島、電話切る。
遠藤、有島、退場。

向井　それから何も決められないままに、ただ時間だけが過ぎていきました。ＤＮＡ鑑定をす
　るとかしないとか、まともに話し合う事すらできずに、長い長い、一年、とでも言いたくなる
　ような二週間が過ぎていきました。

場面転換。

【6】 ぬれぎぬ

◎占部の場合　4　占部、向井

占部の面談室。
以下、このシーンは筆談。

向井　今日は筆談でもいいですか？　相手、僕ですけど。
占部　あの子はどうした？
向井　熱出ちゃったみたいで。ダウンしてます。
占部　流行ってるらしいな、風邪。
向井　みたいですね。占部さんはどうですか近頃？　寒くないですか？
占部　寒い。毎日、同じような毎日。
向井　いつもあの子とはどんなことを？
占部　食事とか。他愛のないこと。
向井　どんな話を？
占部　ご飯はおいしいですか、とか。うまいわけないじゃんて。
向井　でも健康的でしょう。
占部　甘いものが足りない。
向井　甘党なんですか？
占部　ここに来て変わった。あんこなんて大嫌いだった。
向井　お酒もないですしね。
占部　たまには出せばいい。
向井　そうですね。
占部　励みになる。
向井　お酒が好きだったんですね。
占部　毎日飲んでた。もう飲めない。
向井　そろそろ面会してみますか？
占部　無理。
向井　占部さんのご家族とかだったら。
占部　無理。
向井　誰となら良いですか？
占部　あの子と話してればいい。
向井　――いい子ですか？　村田さんは。
占部　あんたのが詳しい。
向井　いいえ。同僚とそんなに話をしません。
占部　学生じゃなかったの？

向井　あ――そうです。
占部　本当はしゃべれるんだろ？
向井　そんなことないです。
占部　ウソだ。手話ができない。
向井　占部さん手話ができるんですか？
占部　少し。
向井　すごい。どこで勉強を？
占部　ほんの少しだけ。

間。

向井　嘘をついていて申し訳ありませんでした。
占部　すぐわかったからいい。
向井　設定は僕が考えました。あの子は嘘つきじゃないです。
占部　ストレスだぞ。
向井　あの子がですか？
占部　そう。いたわれ。
向井　今度、景色のいい山にでも。
占部　あの子が喜ぶことにしろ。
向井　ごはん、おごります。

占部、納得した様子。

向井　占部さんは変わりましたね。
占部　お変わりありません。
向井　村田と話してですか？
占部　違う。
向井　でも印象が変わりました。
占部　あの子の言葉に、私を考えてくれているものがあった。
向井　それはどんな？
占部　忘れた。
向井　いつか教えて下さい。
占部　思い出したら。
向井　待ってます。
占部　あとは時間。ずっと一人でいる。

間。

占部　私は人を殺した。
向井　一緒に考えていきましょう。
占部　一人で考えていくしかない。
向井　そのお手伝いをするのが僕の仕事です。
占部　分かち合えることと、分かち合えないことがある。
向井　なんでも仰ってください。
占部　死んでしまった人間にそんなことが出来るのか？　誰とも何も、分かち合えない。
向井　それじゃ占部さんがずっと一人になってしまいます。

間。

占部　今日はおしまい。さようなら。
向井　もう少しお話しましょう。
占部　次週を待て。
向井　誤解を恐れずにあえていいます。あなたは頑張っても「普通」にはなれません。あなたは永遠に許されない。だけどまだ、生きているんです。
占部　――次週を待て。

間。

向井　妻に浮気をされました。僕の話です。
占部　なんだそれ（笑）
向井　妊娠しています。子供をどうすべきかわからない。

間。

占部　殺すな。

向井、席を立つ。筆談終わり。帰り際に一礼して、

向井　失礼します。

場面転換。

◎門田の場合　7　被害者遺族との面会　第二回

門田の面会室。佐野、門田、有島がいる。

佐野　何も無いですよね、今日も。あなたからは。

間。

佐野　それとも何か？

門田　いや、特には。

佐野　ですよね。じゃあ今日はいくつかあたしの質問に答えてもらっていいですか？

門田　はい。答えられることであれば。

佐野　なんですか、答えられないことって？

門田　いや、別にその――とても難しい質問とか＝

佐野　＝だからなんですかってそれは？　――え、どうして自分に答えない権利なんかあると思っているんですか？

門田　いや、そういうわけじゃなくてその――宇宙のはじまりの姿とか、そういう難しい、僕にもわからないことがたくさんありますから、

佐野　★そんなこと聞くわけ無いでしょ。何いってんの？

間。

佐野　あのォ！　ナイフで刺してるんですよね、優奈を？

間。

佐野　答えなよ。

門田　あ、はい。そうです。

佐野　え、どんな気分でした？

間。

佐野　答えなって。「どんな気分でしたか？」ハイ、なに？　スカッとした？

門田　いや、スカッととかじゃないですけど――。

佐野　じゃ、なんなの？

門田　いや、夢中な感じで――なんか、ワーって気分を盛り上げてこう、夢中になって自分を追い込むみたいな、［そういう感じだったんで。

佐野　［うんうんうん。それは刺す前でしょ？　刺して、どう思ったのかって聞いてんの。

門田　いや、だから夢中で。
佐野　なんなの「夢中で夢中で」って。それ言ってれば済むわけじゃないですよ＝
門田　＝はい。そう、そうです。
佐野　――（ノートを手にとって）なんかいろいろ読ませてもらったんですけど、あなたのその調書っていうか？
門田　はい。
佐野　えーと、事件の半年前の6月14日。この日になんか中華料理？　食事に行ったってことになってるんですけど、あなたの話だと。

間。

佐野　（突然席を立ち）だから聞いてんのかよ！
門田　あ、は、はい。聞いてます。
佐野　返事しろよ。じゃあ。
門田　はい。します。返事。
佐野　（座り）――でね、あ、ごめんねちょっと言葉荒くて、あの、あたしの誕生日が六月十五日なのね。で、この年は誕生日の前日ってことで十四日にあたしの誕生日会ってことでさ、家族でご飯食べに行ってるんだわ。優奈も含めて。
門田　はい。
佐野　おかしいよね？　意味分かる？
門田　はい。わかります。
佐野　うん――え？
門田　あの、えーとちょっと自分も日記とかちゃんとつけてたわけじゃないんで、日付とかはちょっと正確じゃないところがあったかと思うんですけど、
佐野　ああ、そう。
門田　はい。
佐野　じゃあこれは？　この、ビーバーのものまねをしてたとかっていうのはホントなの？　見たことないんだけどあたし。
門田　いや、それは見たことはあるんですけど。
佐野　でもだって、得意だったとか書いてあるよね？
門田　はい。そうだと思ってます。
佐野　え、でも知らないんだよあたし。なんで？
門田　いや――なんでかはちょっと僕もわからないですけど。
佐野　なんかあんたの話読んでるとさ、一時期は優奈とつきあってたみたくなってんじゃん？
門田　はい。そういう風な、あ、その、つきあってたっていうのは、んー、わからないですけど。
佐野　え、つきあっては無いんでしょ？
門田　いや、僕はそういう、一時期は、そういう認識でいた時期もあったわけですけど、

佐野　いやでもさ、そういう感じじゃないんだよあの子は。そっからしてズレてんの。ね、わかる？
門田　はい。いろいろズレてたんだなっていうのは、だんだん、あの、だから、自分、の中でいろいろと「こうだったらいいなー」みたいな、そういう空想っていうか、そういうのがいっぱいあって、あの、だから実際にあったことと、そういう自分の中で考えてたことっていうのが、いろいろ、ズレていってる、ていうのは、あったのかなあと、今では思ってるんですけど。
佐野　なんなの気持ち悪いホント。

間。

佐野　ちゃんと鏡見なよ。ありえないから優奈とあんたが付き合うとか。冷静になって鏡見てたらわかるでしょ？

間。

佐野　いや、だから答えなよ！
門田　はい。はい。そうです。鏡見て。鏡、すごい見ます。これからは鏡だけを見て。
佐野　なにいってんの。バカにしてんのかよあんた！
門田　［いや、いや、いや、
有島　［あの、あの、佐野さんちょっと、
佐野　はい？
有島　あ、えーとあの——そろそろ、お時間があの——。
佐野　は？　まだ始まったばっかりじゃないですか。
有島　ええ、そうなんですけどあの——。
佐野　ああ——。はいはい。
有島　——ええ。
佐野　そうですか、すみません。
有島　いえいえ。
佐野　（門田に）良かったね。今日はもう終わりだって。お礼言っときな。
門田　あ、はい。言っときます。
佐野　言いなよ、いま。
門田　あ、はい。（有島に）ありがとうございます。
有島　うん、うん。——それじゃ佐野さんあの、
佐野　はい。じゃあ。
有島　すみません、なんか。
佐野　ああ、こちらこそ。
有島　門田さん。

門田　あ、はい。（立ち上がって）ありがとうございました！
有島　★立たなくていいからあなたは。

有島、佐野、退場。

◎門田の場合　8　佐野と有島

面談室前の廊下にて。

有島　今日もお忙しいところわざわざお越しいただきまして／
佐野　届きました荷物？
有島　あ、はい。アルバムと、いろいろ、日記とか、アイドルの写真集とか。
佐野　どう思います？
有島　はい。月並みな感想ですけど、本当に優しいお嬢さんだったんだなって。
佐野　そういうことじゃなくてですね。え、――ホントに気づきません？
有島　ええと、なにをでしょう？
佐野　先生ならわかると思ったんですけどね。
有島　はい。すみません。

一拍。

佐野　本当にあたしの妹だったんでしょうか？　あの、門田って男が好きだったのは。
有島　――えーと？
佐野　どうしてもあいつの言っている妹のイメージと、優奈とがつながらないんですよ。
有島　そうですか――。いや、考えたことも無かったですそんなこと。
佐野　まあ、家族の知らない部分ていうか、そういう顔っていうのがもちろんあったとは思うんですけど。あの子だってもう、子供じゃなかったわけですし。
有島　ええ、ええ。
佐野　でも、それにしたってどうしてもつながらないんですよ。それにあいつ――一回も妹の名前呼びませんよね？　裁判の時からずっと。取り調べの時もずっと。

間。

佐野　有島さんの前では呼ぶんですか？　優奈の名前。
有島　いや――。
佐野　呼ばないんですよね？
有島　そうですね。確かに。はい。

佐野　それにあの――あー、とちょっとこれはあの、私もあんま自信のないことなんですけど。
有島　はい。
佐野　あの子は全然、なんて言うんですか、家族とは恋愛の話とか、そういうのを一切しない子だったんですよ。だからつきあってた人とか、そういうのは全然、家族は誰も会ったことがなくって。
有島　ええ、ええ。
佐野　いや、あの子の年齢だったらまだ家族に紹介するような恋人がいなくても、それはそれでおかしいことじゃないっていうのはわかるんですけど、でも、言わないなりになんていうか、私にはなんだかその、優奈と通じ合っている部分があったりもして、だからなんていうか、あの子の恋愛についても私なりに理解していたつもりだったんですね。
有島　はい。
佐野　ですから、いや、んー、中学生のころにはなんだか男の子から告白されてつきあってたとかもあったみたいなんですけど、だからそういうのじゃないのかもしれないんですけど――。だけどやっぱりあの、門田とつきあってたとはどうしても思えないんですよ。
有島　はあ――。
佐野　ああ、ごめんなさい、なんか散らかった話し方になっちゃいまして。
有島　いえいえ、大丈夫ですけど。
佐野　あの子は、同性愛だったんじゃないかなって思うんですよ。多分。
有島　ええっと――そうですか。
佐野　はい。だから事件の本当のところっていうのはまだ全然明らかになってないんじゃないかって気がして。
有島　それはあの、裁判の時にはお話したことなんですか？
佐野　いえ、裁判の時には何も＝
有島　ああ、
佐野　＝いや、ちゃんと話しておけばよかったのかもしれないんですけど、あの時はまだ、あたしも日記には全然目を通していませんでしたし＝
有島　ええ、ええ、
佐野　＝それにあの、とにかくあの子がああいうことになってしまって、うちもめちゃくちゃになってしまって、だから、あたしもしばらくは頭が真っ白になっちゃってましたし、確信は無いんですよ、今も。
有島　んー。
佐野　それにまあ、あいつが自白したって聞いてたし、証拠もちゃんとあったわけですからその――ストーリーとしてはちゃんと出来てるじゃないですか？　だから初めは門田が犯人なんだっていうことにはそれなりに説得力があったっていうか、そう思ってしまってたんですけど／
有島　★じゃ、じゃあ、あの、ちょ、ちょっと伺いたいんですけど、
佐野　はい。

有島　門田とは別に誰か、その、優奈さんとお付き合いをしている女性、がいらしたんですか？

間。

佐野　はっきりとはわからないですけど、でも――はい。いたと思います。

有島　――そうだったんですか。

佐野　なんかちょっとトラブルになっているっていうことは少しだけ聞いてましたし、

有島　★え、え、それは誰なんですか？　っていうのはわかるんですかね？

佐野　それはだから、ぜんぜん予想でしかない段階で私がどうこう言っていいことじゃないと思うんです。だって、もしその人が本当に関わっているんだとしたらそれば、すごく重い罪になるわけじゃないですか？

有島　そうですね。はい。

佐野　でも――日記をすべて読んでいただければ答えはちゃんと、見えてくると思います。

有島　すみません、まだ全部には目を通せていなくって。

佐野　警察には何度も言っているんですけど、ぜんぜんまともに聞いてくれなくって。考え過ぎだろうって。それで終わりにされちゃって。

有島　わかりました。しっかり、読ませていただきます。

佐野　どうかよろしくお願いします。

場面転換。

◎門田の場合　9　最後の面談

再び、面談室。

有島が部屋に戻ってくる。

有島　どうですか門田さん。元気、残ってます？

間。

有島　（先程の佐野の口ぶりを真似て）答えなよ！

門田　あ、はいっ。元気、元気、元気です。

有島　（笑）――ねえ。大変でしたねホント。怖かったなー。

門田　はい。怖かったです。

有島　あ、門田さんの方から何かあります？

門田　いや、もう何も無いです。

有島　ですよねそりゃあ。そうそう。あの、私ね、今日で最後なんですよここ来んの。

門田　――はあ。
有島　だから多分、一生のうちで門田さんと会うのも今日が最後ですね。
間。
有島　あ、次からはまた別の担任がつきますんで。
門田　はい。
有島　やーねー、近頃また管区の方針が変わったみたいで結構人員が削減されるみたいなんです。あんまりいい人材がいない、ってことらしいですよ、うちの会社。
門田　そうなんですか。
有島　ひどいのばっかりですよ。で、契約延長になんなくて私も。失業です。
門田　ああ。
有島　やっぱこういう時は私みたいな人間のクビ切るのが一番楽なんでしょうねえ――。いいように使われてますよ。
門田　僕もあの、いいように使われてます。
有島　え、それはどういう意味？
門田　近頃あの、炊事工場で作業するようになりまして。
有島　ああ、へえー。
門田　はい。
有島　朝早いんでしょあれって？　大変ですね。
門田　はい。早い時はすごい早くて。でも、日勤と夜勤とありますんで。
有島　ふうん。体調、崩さないように。
門田　あ、はい。
有島、向井の傍の椅子に座り、
有島　生まれてこない方がよかった人なんかいない、ってこないだ言ったじゃないですか？
門田　あ、はい。
有島　でも、産まないほうがいい人間はいるって思ってたんですね、私も――。や、こないだ子供を堕ろしまして。はい。
間。
有島　あなたも一人、あたしも一人、人の命を奪ったってことになるんですかね。
間。

有島　ってなんかそんな考え方は良くないのかもしれないですけど。だって別にねえ、子供を堕ろしたのなんて私だけじゃないわけですし、望まない妊娠っていうのはあるわけだしだから、そういう人はそういう人で胸張って生きていけばいいじゃーんと思ってるんですけどねー——。なーんかすっきりしなくって。もやもやーってしちゃって。

間。

有島　それってきっと、あたしはこうやって普通に暮らしてるからなのかなって思うんですけどね。そうそう。だからこれって、門田さんの方が特別残酷な殺し方をしたから、ってことになるのかもしれませんね。

間。

有島　変な話してごめんなさい。最後だと思ったらなんか気が抜けちゃったんですかね。すみません。ちゃんとします。

門田　いや、ちゃんとしてますよ。

有島　ああ、あたし？

門田　ええ。有島さんはずっと、ちゃんとしてたと思いますよ。

有島　——ありがと。

門田　いえ。

有島　——なんかいい感じの幕切れだね。このままここで帰っちゃおっかなーって気もするんですけど——最後に、どうしても聞いとかなくちゃいけないことがありまして。

有島、席を立ち、ボイスレコーダーの録音を切る。

有島　ここからは録音ナシで行きましょう。

門田　はい。

有島　どうですか？　少しは反省できました？　門田さん。

門田　そりゃまあ——。

有島　最後なんですから、本当のこと話しましょうよ（笑）

門田　え、してますよそりゃ。なんですか急に。

有島　あなた優奈さんのこと名前で呼ぶのすごーく嫌がってましたよね？

間。

有島　それってどうしてなんですか？

門田　自分の——大切な人の名前だから。

有島　★本当ですか？＝

門田　＝本当です。
有島　嘘ですよね？
門田　え？　どうしてそんなこと言うんですか？　嘘なんて別に僕は――。
有島　誰かに頼まれたんですか？
門田　え？　いや、誰にも頼まれてないですけど。え、え、なにいってんですか急に。
有島　門田さんには本当に好きな人が別にいて、その人に頼まれて殺しちゃったんですか？
　優奈さん。
門田　いや、え？　なんだか着いていけない話になっちゃってるんですけど、
有島　優奈さんじゃないんですよね。あなたが愛してたのって？
門田　いや、はあ？　ちょっとなにいってるんですか？　やめてくださいよ。
有島　違うんですか？
門田　え、じゃあ誰だって言いたいんですか？　誰に頼まれたんですか僕は？
有島　誰なんですか？　――それですよ。ええ。それを教えて欲しいんです。
門田　言うわけ無いじゃないですか。

　間。

門田　もう帰ってくださいよ！　なんか気分悪いですよ。え、どうせ今日で最後なんですよね。なんですか、最後だからって適当なこと言わないでくださいよ。僕あの、あなたのストレス発散のための道具じゃありませんので。なんか、気分悪いですよホント。
有島　じゃあ、優奈さんはあなたのストレス発散のための道具だったんですか？
門田　え、帰ってくださいよ。帰ってください。［なにやってんですか、帰ってください。
有島　［なんにも言ってなかったんですね、今まで。取り調べでも。裁判でも。［［あたしと話している時もずっと。
門田　［［帰れよ！　帰れって！　なんなんだよ帰れって言ってんだろ！
有島　どうして？　じゃあ、関係無かったの？　優奈さんは関係無かったのにあんた殺したの？
門田　あの人も――あの人も諦めたんですよ――優奈さんを。諦めなければ殺しません。
有島　それで――あんたは頼まれて殺しちゃったわけ？
門田　有島さんみたいな人にはわかりませんよ。永遠にわかりません。
有島　わかるわけないでしょそんなの。それだけ？　それだけの理由で？
門田　それ以上なんか必要あります？

　間。

門田　人が誰かのために何かをしてやりたいって思うこと。その人の喜ぶ顔が見たいって思うこと。どこが悪いんですかそれの？
有島　――死刑でいいよ、あんたみたいなやつは。

門田　だからそういってたじゃないですか！　僕はずっと。
有島　死刑でいいんだよ。あんたなんかホントに。
門田　僕もそう思いますよ。だけど、死刑にはならないんですよね。特区だから。

間。

門田　やれるもんならやってみてくださいよ。いつでもどうぞ？
有島　するわけないでしょ。あんたとは違うんだよ。人殺し。
門田　え？　でもあれですよね、あなたも一人、僕も一人――じゃなかったでしたっけ？

間。

有島　うそだよバーカ！　するわけないでしょそんなこと。そうやって言って、あんたと同じ立場になったらいろいろ話すかなあと思ったんだよ。

有島、書類の束やボイスレコーダーを鞄にしまい、帰り支度をする。

門田　本当ですか？

間。

門田　嘘ですよね？

有島、退場。
場面転換。

▼音響：ＳＥ　雑踏・雨

【7】未来の夢

◎ふたりの家　3　発信

有島、向井の家。ふたりがいる。少し離れた場所に座っている。

向井　そう。
有島　うん。

間

有島　ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。
向井　うん、うん、もう、あの――。

間。
と、向井に電話がかかってくる。
舞台上、別の場所に村田と遠藤が登場。
向井、それに出る。

村田　あ、おはようございます。村田です。
向井　ああ、どうもどうも。もう時間ですよね。
村田　はい。朝礼、さっき終わって。
向井　ええ、ええ。
村田　どう、しましょう？　病欠ってことにしときましょうか？
向井　いや、行きますよ。遅刻で。
村田　そうですか。あー、無理しないでくださいよ。
向井　いやいや、大丈夫大丈夫。あのー、一時間もしないでつけると思いますんで。
村田　はい。じゃあ。お待ちしてます。
向井　ごめんねー。
村田　いえいえー。

電話切る。

☆有島　レナちゃん？
向井　（頷く）
有島　怒ってた？
向井　いや、心配された。

有島　――そう。

以上のやりとりと同時並行で事務所での会話が行われる。

☆遠藤　なんだって？
村田　来るそうです。遅刻で。
遠藤　ふーん。まあ、しょうがねえな休むよりマシだ。
村田　ですかね。

間。

遠藤　あいつにも踏ん張ってもらわないとな――。門田に関しては俺も直接入って、ここ一週間重点的に動くからさ。
村田　はい。
遠藤　向井と俺と、まあ、やれるだけやって――あとは警察にもう一回動いてもらうようにしないとな。道筋は作るよ。
村田　やっぱ、大変ですね、有島さんいなくなっちゃうと。
遠藤　別に。残ってたって仕事的には戦力になんなかったんじゃない？
村田　ですかね。
遠藤　ま、いずれにせよ占部に関してはおまえ一本で行くことになるんだからさ。頼むよホント。
村田　はい。がんばります。
遠藤　おう、気合いな！
村田　はい！

遠藤、村田、退場。
場面、ふたりの家に戻って。

向井　じゃあ、行ってくる。
有島　行ってらっしゃい。
向井　うん。

向井、スーツに袖を通し、通勤バッグを手にして。

向井　あの――昨日さ、また夢を見たよ。

間

有島　どんな？
向井　すっごく怖い夢でさ。俺はそう、ちょうどこの家そっくりの家にいてね、そのイスそっくりのイスに座っているんだよ。スーツで。ひとりで。
有島　ふうん。
向井　それでなんか、ああ、おでん喰いたいなあと思って。――というのもね、まっ白なはんぺんを買ってそれをまっ白な子猫に与えたらどうなるんだろうかと、そう考えてまして。

一拍。

向井　こう、おいしいはんぺんをうまく食べられない子猫とはんぺんと、お互いモフモフして、モフモフと格闘するモフモフみたいな？　モフモフ頂上決戦、モフ・バーサス・モフ、みたいな？　さぞやかわいいだろうなと思って。ラヴリー。キュート。応えられない愛らしさ。
有島　聞いたよ、それ。
向井　そうだったっけ？
有島　うん。

間。

有島　で、それを考えていたわけね？　そのイスに座って。
向井　そう。そうなんだよ。そのイスに座って。でさ、そこに電話がかかってきて。プルルルっって。出るわけ俺。「あ、もしもしー」かなんか言って。それはもしかするとりっちゃんからの電話だったのかもしれない。多分そう。きっとそうだと思うよ。「向井くーん、かわいい女の子だったよー」っていう電話だったのかもしれない。「向井くーん、今おろしてきたよー」っていう電話だったのかもしれない。わからないよ。もちろん内容なんてわからない。だって俺はさ、君からのその電話に出てあげることができなかったわけだから。――俺だって電話に出ようとしてたんだけどね、ダメなやり方だったけど、俺なりに、そのつもりだったんだよ。だけど出られないんだ。絶対に出られない。だからずうっと電話は鳴り続けてる。あれ？と思ってさ。もう一回ちゃんとボタン押さなくちゃと思って。何度も何度も画面を押して見るんだけどさ、ダメなんだよ。それでそのうち――はい、着信音止まりましたけど？　みたいな。――怖かったよホント。すっごく怖い夢だったんだ。

有島、自分の携帯電話を探し、見つけ出し、電話をかける。
ややあって、向井の携帯電話が鳴る。
ずっと鳴り続ける。
有島は耳に携帯電話をあてて、誰かがその電話に出るのを待っている。
向井はやがて携帯電話を手にする。
溶暗。
やがて電話の音が止む。

▼音響:曲in　カーテンコール

幕

【参考文献】

死刑でいいです　―孤立が生んだ二つの殺人―　池谷孝司
秋葉原事件　中島岳志
桶川ストーカー殺人事件　清水潔
解　加藤智大
「少年A」十四歳の肖像　高山文彦
地獄の季節―「酒鬼薔薇聖斗」がいた場所　高山文彦
少年A矯正２５００日全記録　草薙厚子
少年Aこの子を産んで――　少年Aの父母
淳　土師守
彩花へ　生きる力をありがとう　山下京子
彩花へ２　山下京子
心にナイフをしのばせて　奥野修司
なぜ君は絶望と戦えたのか　本村洋の３３００日　門田隆将
消された一家　―北九州・連続監禁殺人事件　豊田正義
逮捕されるまで　空白の２年７カ月の記録　市橋達也
ドキュメント死刑囚　篠田博之
刑務所の中　花輪和一
キャリア官僚になったアタシ。。。でも、挫折しました（>_<）　後藤裕美
法務教官の仕事がわかる本　公務員の仕事シリーズ
わたし、公僕でがんばってました。　古林海月
日本の難点　宮台真司
人間にとって法とは何か？　橋爪大三郎
無能力批評　―労働と生存のエチカ―　杉田俊介
フリーターにとって「自由」とは何か？　杉田俊作
丸山眞男　―リベラリストの肖像―　苅部直
これからの「正義」の話をしよう。　マイケル・サンデル
〈対話〉のない社会　中島義道
悪について　中島義道
新世紀神曲　大澤信亮
ナショナリズムは悪なのか？　萱野稔人
自由はどこまで可能か　リバタリアニズム入門　森村進
国家民営化論　笠井潔
死刑囚ピーウィーの告白―猟奇殺人犯が語る究極の真実　ウィルトン・アール
心からのごめんなさいへ―一人ひとりの個性に合わせた教育を導入した少年院の挑戦―　品川裕香